

# 総角

## 渋谷栄一訳

### 第一章 大君の物語 薫と大君の实事なき暁の別れ

#### 「第一段 秋、八の宮の一周忌の準備」

何年も耳馴れなかつた川風も、今年の秋はとて身置き所もなく悲しくて、一周忌の法要をご準備なさる。一通りの必要なこともは、中納言殿と、阿闍梨などがご奉仕なさつたのであつた。こちらでは法服のこと、経の飾りや、こまごまとしたお仕事を、女房が申し上げるのに従つてご準備なさるのも、まことに頼りなさそうにお気の毒で、このような他人のお世話がなかつたら」と見えた。

「ご自身でも参上なさつて、今日を限りに喪服をお脱ぎになるときのお見舞いを、丁寧に申し上げなさる。阿闍梨もこちらに参上していた。名香の糸を引き散らして、」ううして過ごして来たことよ」などと、お話しなさつている時であつた。結び上げた糸繰り台が、御簾の端から、几帳の隙間を通して見えたので、そのことだと察して、わたしの涙を玉にして糸に通して下さい」と口ずさんでいらつしやるのは、伊勢の御もこうであつたらうと、興深くお思い申し上げるにつけても、内側の人は、知つたかぶりにお返事申し上げなさるようなのも遠慮されて、糸ではないのに」とか、貫之が生きていての別れでさえ、心細いものとして詠んだというの」などとなるほど古歌は、人の心を晴らすすがであつたのをお思い出しなさる。

#### 「第二段 薫、大君に恋心を訴える」

御願文を作り、経や仏の供養なさる心づもりなどをお書き出しなさる筆のついでに、客人が、

「総角に未長い契りを結びこめて、一緒になつて会いたいものです」

と書いて、お見せ申し上げなさると、いつもの、と煩わしいが、

「貫き止めることもできないもろい涙の玉の緒に、未長い契りをどうして結ぶことができましよう」

とあるので、一緒になれなかつたら生きている甲斐ありません」と、恨めしそうに物思ひにお耽りになる。

「ご自身のお身の上については、このように何とはなしに話をそらせて相手をなさらないので、すらすらと意中を申し上げることもできず、宮のご執心を真面目に申し上げなさる。

「それ程までご執心でないことを、このようになことに少し積極的であらうしやるご性格で、一度申し出されては後に引かない意地からかと、あれやこれやと、十分にお気持ちを探り申し上げております。ほんとうに不安なようではありませんので、どうしてこのようにむやみに、お避けになるのでしょうか。」

男女の仲の様子などを、ご存知でないようには拝見しませんのに、いやに、よそよそしくばかりおあしらいなさるので、これほど心から信頼申し上げている気持ちと違つて、恨めしい気がします。どのようにお考えになつているのかなどを、はっきりとお聞き致したいものです」

と、たいそう真面目になつて申し上げなさるので、

「お気持ちに背くまいとの気持ちなればこそ、こうしてまでおかしな世間の例にもなる状態で、隔てなくお相手しているのでございます。それをお分りにならなかつたことこそ、浅い気持ちがあるような気がします。おっしゃるように、このような住まいなどに、情けの深い人は、ありたけの物思いをし尽くすでしょうが、何事にも後れて育ちましたので、このおっしゃるような方面は、故人も、一向に何一つ、こういう場合にはああいう場合にはなどと、将来のことを予想して、おっしゃっておくこともなかつたので、やはり、このような状態で、世間並みの生活を諦めるようお考え置きであつた、と思ひ合われますので、何ともお答え申し上げようがなくて。」

一方では、少し生い先長い年頃で、山奥暮らしはお気の毒にお見えになるお身の上を、まことにこのように枯木にはさせたくないものだど、人知れず面倒見ずにはいられなく思っているのですが、どのような縁なのでしようか」

と、嘆息して途方に暮れていらっしやうたときの様子、たいそうおいたわしく感じられる。

「第三段 薫、弁を呼び出して語る」

てきぱきと一人前に振る舞っても、どうして賢くことをお決めになれようかと、もつとも思われて、いつものように、老女を召し出して相談なさる。

「今までは、ただ来世の事を願う気持ちで参っておりますが、何となく心細そつにお思いであったよつなご晩年に、この姫君たちのことを、考え通りにお世話申し上げるようにおっしやり約束したのですが、お考え置き申されたご様子とは違つて、お二人の気持ちが、とてもとても困つたことに強情なのは、どのようにお考え置きになつていた人が別であつたのかと、疑わしくまで思われず。

自然とお聞き及びになつてゐることもありません。とても妙な性質で、世の中に執着することはなかつたが、前世からの因縁でしようか、こんなにまでお親しみ申したのでしよう。世間の人もだんだんと噂するらしくもあるから、同じことなら故人のご遺言にお背き申さず、わたしも姫君も、世間の普通の男女のように心をお交わし申したい、と思ひ寄り申したのは、不似合いなことであつても、そのような例もないわけではありません」

などとおっしやり続けて、

「宮のお身の上を、このよつに申し上げるのに、不安でないと、気をお許しにならないご様子なのは、内々で、やはり他にお考えの人がいるのでしようか。さあ、どうなのですか、どうなのですか」

と嘆きながらおっしやるので、いつもの、良くない女房連中などは、このよつなことに、憎らしいおせつかいを言つて、調子を合わせたたりなどするよつであるが、まったくそつではなく、心の中では、理想的なお二人

方の縁談だわ」と思つが、

「第四段 薫、弁を呼び出して語る(続き)」

「もともと、このよつに人と違つていらっしやるお二方のご性格のせいでしょうかと、どうしてもどうしても、世間の普通の人のよつに、何やかやと世間並みの結婚を、お考えになつていらっしやるご様子でございませぬ。

こつして、仕えております誰彼も、今まででさえ、何の頼りになる庇護もございませぬでした。身を捨てがたく思ふ者たちだけは、身分身分に依じて暇をもらつて離れ去り、昔からの古い縁故の人も、多くはお見限り申した邸に、まして今では、立ち止まりがたそつに困り合つておりまして、ご在世中にこそ、格式もあつて、不釣合なご結婚は、お気の毒だわなどと、昔氣質の律儀さから、おためらいになつていました。

今では、このよつに、他に頼りのないお身の上の方たちで、どのよつにもどのよつにも、成り行き次第に身を任せなさるのを、むやみに悪口を申し上げるよつな人は、かえつて物の道理を知らず、言いよつもないことでしょう。どのよつな人が、まことにこつして一生をお送りなさることができましようか。

松の葉を食べて修業する山伏でさえ、生きてゐる身の捨て難いことによつて、仏のお教えも、それぞれの流派をつくつて行つてゐる、などというよつな、よくないことをご忠告申し上げ、若いお二方のお気持ちがお迷いになることが多くございませうですが、志操を曲げよつともなさらず、中の宮を、何とか一人前にして差し上げたい、と思ひ申し上げていらっしやるよつでございませぬ。

このよつに山奥にお訪ね申し上げなさるよつなお志の、幾年もお世話していただくご行為に対しても、親しくお思ひ申し上げなつて、今ではあれやこれやと、こまごまとした方面のこともご相談申し上げていらっしやるよつで、あの御方を、おっしやるよつお望み申してくださるならば、とお思ひのよつです。

宮のお手紙などがございませうよつなものは、全然真剣な気持ちからではあるまい、とお考えのよつです」

と申し上げると、

「おいたわしいご遺言を聞きおき、露の世に生きている限りは、お付き合いを願いたいとの気持ちなので、どちらの方と一緒になっても、同じことになるでしょうが、そのようにまで、お考えになつてゐるといふのは、まことに嬉しいことですが、心の惹かれる方は、これほど捨て切つた世なのですが、やはり執着してしまうものなので、今さらそのようには考え改められません。世間並みのあだつばい恋ではないのですよ。」

ただこのような物を隔てて、言い残した状態でなく、差し向かいで、ともかくにも無常の世の話を、隔て心なく申し上げて、お隠しになるお心の中をすつかり打ち明けてお相手してくださるなら、兄弟などのように親しい人もなくて、とても淋しいので、世の中の思うことの、しみじみとしたこと、おもしろいこと、悲しいことも、その時々のお思いを、胸一つに収めて過ごしてきた身の上なので、何と言つても頼りなく思われるので、親しくお頼み申し上げます。

後の宮は、親しく、そのように何ということなく思ひのままのこまごまとしたことを、申し上げられる方ではありません。三条の宮は、母親と申し上げるほどでもないお若々しさですが、分限がありますので、気安くお親しみ申し上げることはできません。その他の女性は、すべてたいそう疎々しく、気が引けて恐ろしく思われて、自ら求めて結婚相手もなく心細いのです。

いい加減な好き心からも、懸想めいたことは、とても気恥ずかしくて性に合わず、体裁悪い不器用さで、まして心に思い詰めてゐる方のことは、口に出すのも難しく、恨めしくも鬱陶しくもお思い申し上げる様子をさえ見ていただけないのは、自分ながらこの上なく愚かしいことだ。宮のお事をも、悪くお計らい申し上げまいと、お任せ下さいませんか」

などとおっしゃつてゐた。老女は、老女で、これほど心細いので、理想的なご様子を、とても切に、そうして差し上げたいと思うが、どちらも気恥ずかしいご様子の方々なので、思ひのままには申し上げられない。

「第五段 薫、大君の寢所に迫る」

今夜はお泊まりになつて、お話などをのんびりと申し上げたくて、ぐずぐずして日をお暮らしになつた。はつきりではないが、何か恨みがましいご様子、だんだんと無性に昂じて行くので、厄介になつて、気を許してお話し申し上げることも、ますますつらいけれど、全体的にはめつたにいい親切なご性格の方なので、ひどくすげないお扱いもできなくて、面会なさる。

仏のいらつしやる間の中の戸を開けて、御燈明の光を明るく照らさせて、簾に屏風を添えておいでになる。外の間にも大殿油を差し上げるが、疲れて無作法なので、丸見えでは「などと制止して、横に臥せつていらつしやつた。果物などを、特別なふうにはなく整えて差し上げさせなかつた。

お供の人びとにも、風流なお肴などをお出させなかつた。廊のような所に集まつて、こちらの御前は人の気配を遠ざけて、しみじみとお話申し上げなさる。気をお許しになるはずもないものの、優しそうに愛嬌があり、物をおつしやる様子が、一方ならず心に染みいつて、胸が切なくなるのもたわいない。

「このように何でもない隔て物だけを障害にして、もどかしく思つては過ごしてきた不器用さが、あまりにも馬鹿らしいな」と思い続けられるが、さりげなく平静を装つて、世間一般の事柄を、しみじみと興味を惹くようにいろいろとおもしろくたくさんお話し申し上げなさる。

内側では、女房たち、近くに「などとおっしゃつておいたが、そんなにも、よそよそしくなさらないで欲しい」と思つてゐるようなので、たいしてお守り申さず、尻ごみ尻ごみしながら、皆寄り臥して、仏の御燈明を明るくする人もいない。何となく気づまりで、こつそりと人をお呼びになるが、目を覚まさない。

「気分が悪く、苦しうございますので、少し休んで、明け方に再びお話し申し上げましょう」

と言つて、お入りになろうとする様子である。

「山路を分け入つて来ましたわたしは、あなた以上にとても苦しいのですが、このようにお話し申し上げたりお聞きしたりすることによって慰められております。わたしを捨ててお入りになつたら、たいそう心細いでしょ」と言つて、屏風を静かに押し開けてお入りになつた。たいそう気味悪く

て、半分程お入りになったところ、引き止められて、ひどく悔しく氣に合わないので、

「隔てなくとは、このようなことを言つのでしうか。変なことですね」と、非難なざる様子が、ますます魅力的なので、

「隔てない心を全然お分かりでないので、お教え申し上げましようかね。変なことだとも、どのようなことに、お考えなのでしうか。仏の御前で誓言も立てましよう。嫌な、お恐がりなさるな。お気持ちを損ねまいと初めから思つておりますので。他人はこのようにも推量して思つまいでしうが、世間の人と違つた馬鹿正直者で通しておりますからね」

と言つて、奥ゆかしいほどの火影で、御髪がこぼれかかっているのを、掻きやりながら御覧になると、姫君のご様子は、申し分なくつやつやと美しい。

「第六段 薫、大君をかき口説く」

「このように心細くひどいお住まいで、好色の男は邪魔者もないのだが、自分以外に訪ねて来る人もあつたら、そのままにしておくだろうか。どんなに残念なことだろうに」と、将来はもちろんのこと今までの優柔不断さまで、不安に思われなさるが、言いようもなくつらいと思つてお泣きになる「様子が、たいそうおいたわしいので、このようにではなく、自然と心がとけてこられる時きつとあるだろう」と思い続ける。

無理やり迫るのも気の毒なので、体裁よくおなだめ申し上げなさる。

「このようなお気持ちとは思いよらず、不思議なほど親しくさせて頂いたことを、不吉な喪服の色など、見ておしまいになられる思いやりの浅さに、また自分自身の言いようのなさも思い知らされるので、あれこれと気の慰めようもありません」

と恨んで、何の用意もなく質素な喪服でいらつしやる墨染の火影を、とても体裁悪くつらいと困惑していらつしやうた。

「まことにこのようにまでお嫌いになるわけもあるのかと、恥ずかしくて、申し上げようもありません。喪服の色を理由になさるのも、もつともなことですが、長年お親しみなかつたお気持ちの表れとしては、そのような憚らねばならないような、今始まつたような事のようにお思いなさつてよいも

のでしうか。かえつてなさらなくてもよいご分別です」

と言つて、あの琴の音を聴いた有明の月の光をはじめとして、季節折々の思ふ心の堪えがなくなつてゆく有様を、たいそうたくさん申し上げなさると、「氣恥ずかしいことだわ」と疎ましく思つて、「このような気持ちでありながら何喰わぬ顔で真面目顔していらつしやうのだわ」と、お聞きになることが多かつた。

お側にある低い几帳を、仏の方に立てて隔てとして、形ばかり添い臥しなかつた。名香がたいそう香ばしく匂つて、櫛がとも強く薫つている様子につけても、人よりは格別に仏を信仰申し上げていらつしやるお心なので、気が咎めて、服喪中の今、折もあるうに堪え性もないようで、軽率にも、当初の気持ちと違つてしまひそうなので、このような喪中が明けたころに、姫君のお気持ちも、そうはいつても少しはお緩みになるだろう」などと、つとめて気長に思いななさる。

秋の夜の様子は、このような場所でなくてさえ、自然としみじみとしたことが多いのに、まして峰の嵐も籬の虫の音も、心細そうにばかり聞きわたされる。無常の世のお話に、時々お返事なさる様子、実に見ごたえのある点が多く無難である。眠たそうにしていた女房たちは、「こうなつたのだわ」と、様子を察して皆下がつてしまつた。

父宮がご遺言なさつたことなどをお思い出しなさると、なるほど、生き永らえると、意外なこのようなどんでもない目に遭うものだわ」と、何もかも悲しくて、水の音に流れ添う心地がなさる。

「第七段 実事なく朝を迎える」

いつのまにか夜明け方になつてしまつた。お供の人びとが起きて合図をし、馬どもが嘶く声も、旅の宿の様子など供人が話していたのを、ご想像されて、おもしろくお思いになる。光が見えた方面の障子を押し開けなかつた、空のしみじみとした様子を一緒に御覧になる。女も少しいざり出でなかつたが、奥行きのない軒の近さなので、忍草の露もだんだんと光が見えて行く。お互いに実に優美な姿態、容貌を、

何と一つではなくて、ただこのように月や花を、同じような気持ちで愛

で、無常の世の有様を話し合つて、過ごしたいものですね」

と、たいそう親しい感じでお語らい申されると、だんだんと恐ろしさも慰められて、

「このように面と向かつての体裁の悪い恰好でなく、何か物を隔ててなどしてお答え申し上げるならば、ほんとうに心の隔てはまったくないのですが」とお答えなされる。

明るくなってゆき、群鳥が飛び立ち交つ羽風が近くに聞こえる。まだ暗いうちの朝の鐘の音がかすかに響く。今は、とても見苦しいですから」ととても無性に恥ずかしそうにお思いになつていた。

「事あり顔に朝露を分けて帰ることはできません。また、人はどのように推量申し上げましょうか。いつものように穩便にお振る舞いになつて、ただ世間一般と違つた問題として、今から後も、ただこのようにしてくださいませ。まったく不安なことはないとお思ってください。これほど一途に思い詰める心のうちを、いじらしいとお分かりくだらないのは効ないことですよ」と言つて、お帰りなるような様子もない。あきれて、見苦しいことと思つて、

「今からは、そのようなことなので、仰せの通りにいたしましたしう。今朝は、またお願い申し上げていることを聞いてくださいませ」

と言つて、ほんとうに困つたとお思いなので、  
「ああ、つらい。暁の別れだ。まだ経験のないことなので、なるほど、迷つてしまひそうだ」

と嘆きがちである。鶏も、どこのであろうか、かすかに鳴き声がするので、京が自然と思ひ出される。

「山里の情趣が思ひ知られます鳥の声々に、あれこれと思ひがいつぱいになる朝け方ですね」

女君、

「鳥の声も聞こえない山里と思つていましたが、人の世の辛さは後を追つて来るものですね」

障子口までお送り申し上げなされて、昨夜入つた戸口から出て、お臥せりになつたが、眠ることはできない。名残惜しくて、ほんとにこのようにせつなく思うのだったら、幾月も今までのんびりと構えていられなかつた

るうちに」などと、帰ることを億劫に思われなされる。

「第八段 大君、妹の中の君を薫にと思つ」

姫宮は、女房がどう思つているだろうかと気が引けるので、すぐには横におなりになれず、頼みにする親もなく世の中を生きてゆく身の上のつらさを、仕えている女房連中も、つまらない縁談の事を何やかやと、次々に従つて言い出すよつだから、望みもしない結婚になつてしまひそうだと思案なされる一方で、

「この人の様子や態度が、疎ましくはなさそうだし、故宮も、そのような気持ちがあつたらと、時々おっしゃりお考えのようだったが、自分自身はやはりこのように独身で過ごそう。自分よりは容姿も容貌も盛りで惜しい感じの中の宮を、人並みに結婚させたほうが嬉しいだろう。妹の身の上のことなら、心の及ぶ限り後見しよう。自分の身の世話は、他に誰が見てくれようか。」

この人のお振舞が、いい加減でたらめならば、このように親しんできた年月のせいで、気を緩める気持ちもありそうなのだが、立派すぎて近づきたい感じなもの、かえつてひどく気後れするので、自分の人生はこうして独身で終えよう」

と思ひ続けて、つい声を立てて泣き泣き夜を明かしなされたが、そのため気分がとても悪いので、中の宮が臥していらつした奥の方に添つてお臥せりになる。

いつもと違つて、女房がささやいている様子が変だと、この宮はお思ひになりながら寝ていらつしたがつたが、こつしていらつしたつたので、嬉しくて、御衣を引き掛けて差し上げなされると、御移り香が隠れようもなく、薫ってくる感じがするので、宿直人がもてあましていたことが思ひ合わされて、ほんとうなのだろう」と、お気の毒に思つて、眠つてしまつたようにして何もおっしゃらない。

客人は、弁のおもとを呼び出さなされて、こまごまと頼みこんで、ご挨拶をしかつめらしく申し上げお出になつた。総角の歌を戯れの冗談にとりなしても、自分から、一尋ほどの隔てはあつたにしてもお会いした

ものと、この君もお思いだろう」と、ひどく恥ずかしいので、気分が悪い  
と、一日中横になっていらつしやうた。女房たちは、

「法事までの日数が少なくなりました。しつかりと、ちよつとしたことでもさ  
えも、他にお世話いたす人もいないので、あいにくのご病気ですこと」と

と申し上げる。中の宮は、組紐など作り終えなさつて、

「心葉などを、どうしてよいかわかりません」

と、無理におせがみ申し上げなされるので、暗くなつたのに紛れてお起き  
になつて、一緒に結んだりなどなされる。中納言殿からお手紙があるが、

「今朝からとても気分が悪くて」

と言つて、人を介してお返事申し上げなされる。

「いかにも、見苦しく、子供っぽくいらつしやいます」

と、女房たちはぶつぶつ申し上げる。

第二章 大君の物語 大君、中の君を残して逃れる

「第一段 一周忌終り、薫、宇治を訪問」

御服喪などが終わつて、お脱ぎ捨てになつたのにつけても、片時の間も  
生き永らえようとは思わなかつたが、あつけなく過ぎてしまつた月日の間  
をお思いになると、ひどく思つてもいながつた身のつらさと、泣き沈んでい  
らつしやるお二方のご様子が、まことにお気の毒である。

幾月も黒い喪服を着馴れていらしたお姿が、薄鈍色になつて、たいそう優  
美なので、中の宮は、なるほど女盛りで、可憐な感じが勝つていらつしやう  
た。御髪などを洗い清めさせて整わせて拝見なされると、この世の憂いが忘  
れる気がして素晴らしいので、心中密かに、近づいて見劣りがすることは  
ないだろう」と、頼もしく嬉しくて、今は他に見議る人もいなくて、親代  
わりになつて大切にお世話申し上げなされる。

あの方は、ご遠慮申し上げなさつた服喪期間中もお改まりになつていよ  
うな九月も、待ちきれず、再びおいでになつた。いつものようにお会い申  
したい」と、またご挨拶があるので、気分が悪くなつて、厄介に思われる

ので、何かと言ひ訳申し上げてお会いなさらない。

「意外に冷たいお心ですね。女房たちもどのように思つてしょう」

と、お手紙で申し上げなさつた。

「今を限りと脱ぎ捨てました時の悲しみに、かえつて前より塞ぎこんでおり  
まして、お返事申し上げられませんか」

とある。

恨みのやりばがなくて、いつもの女房を召して、いろいろとおつしやる。  
世にまたとない心細さの慰めとしては、この君だけをお頼み申し上げてい  
た女房たちなので、思い通りに結婚なさつて、世間並の住まいにお移りな  
どなされるのを、とてもおめでたいことと話し合つて、ただお入れ申そう  
と、皆しめし合せているのであつた。

「第二段 大君、妹の中の君に薫を勧める」

姫宮、その様子を深くご存知ないが、このように特別に一人前に親しく  
しているらしいので、気を許して、気がかりな考えがあるかもしれない。昔  
物語にも、自分から、とかく事件が起こることはあるうか。気を許しては  
ならない女房の心であるようだ」と思い至りなさつて、

「せめて恨みが深いなら、この妹君を押し出そう。たとえ見劣りする相手で  
も、そのように見初めては、いい加減には扱わないお心のようなから、わ  
たし以上に、少しでも見初めたらきつと慰むことであるう。言葉に表して  
は、どうして、急に乗り換える人があろうか。希望通りでない、承知す  
る様子のないらしいのは、一つには、こちらの思つたことを、筋違いに浅い  
思慮ではないかななどと、遠慮なされるだろう」

とご計画なされるが、そのそぶりさえお知らせなさらなかつたら、恨みを  
受けよう」と、我が身につまされてお気の毒なので、いろいろとお話になつ  
て、

「故人のご意向も、世の中をこのように心細く終えようとも、かえつて物笑  
いに、軽々しい考えをするな、などと遺言なさつたが、在世中の御足手ま  
といで、勤行のお心を乱した罪でさえ大変であつたのに、今はの際に、せ  
めてそのようにおつしやうた一言だけでも違えまい、と思ひますので、心細

いなどとも格別思わないが、この女房たちが、妙に強情者のように憎んで  
いるらしいのは、ほんとに訳が分かりません。

女房の言うように、私と同じように独身でお過しになるのも、明け暮れ  
の月日がたつにつけても、あなたのお身の上ばかりが、惜しくおいたわし  
く悲しい身の上とお思い申し上げますが、せめてあなただけでも世間  
並みに結婚なさって、このようなわが身の有様も面目が立つて、慰められ  
るようお世話申し上げたい」

と申し上げなされると、どのようにお考えなのかと、情けなくなつて、

「お一人だけが、そのように独身で終えなさいとは、申されたでしょうか。頼  
りないわが身の不安さは、よけいあるように、お思ひのようでした。心細  
さの慰めには、このように朝夕にお目にかかるより他に、どのような手段  
がありましようか」

と、何やら恨めしそうに思つていらつしやるので、なるほどと、お気の  
毒になつて、

「やはり、誰も彼もが困つた強情者のように言い思つていらっしゃるのにつけ  
ても、途方に暮れておりますよ」  
と、言いかけてお止めになつた。

「第三段 薫は帰らず、大君、苦惱す」

日が暮れて行くのに、客人はお帰りにならない。姫宮は、とても困つたこ  
とだとお思ひになる。弁が参つて、「ご挨拶などをもお伝え申し上げて、お  
恨みになるのもごもつともなことを、こまごまと申し上げると、お返事も  
なさらず、お嘆きになつて、

「どのよつに振る舞つたらよいものか。どちらかの親が生きていらつしやつ  
たら、どうなるにせよ、親からお世話され申して、運命というものにつけ  
ても、思い通りにならない世の中なので、すべてよくあることとして、物  
笑いの非難も隠れるというもの。仕えている女房は皆年をとり、賢そうに  
自分自身では思ひながら、いい気になつて、お似合ひのご縁だと言ひ聞か  
せるが、これが、すっかりしたことだろうか。一人前でもない考えて、た  
だ勝手に言つてゐるばかりだ」

とお考えになると、引き動かさんばかりにお勧め申し上げ合うのも、ま  
ことにつらく嫌な感じがして、従つ気になれない。同じ気持ちで何事も「  
相談申し上げなされる中の宮は、このような結婚に関する話題には、もう少  
しご存知なくおつとりして、何ともお分かりでないので、」変わった身の上  
だわ」と、ただ奥の方に向いていらつしやるので、

「いつもの服装にお召し替えなさいませ」

などと、お勧め申し上げながら、皆、お目にかからせようという考えのよ  
うなので、あきれて、なるほど、何の支障があるだろうか。手狭な所で、こ  
のようなご生活の仕方ない、山梨の花、逃げることもできないのであつた。  
客人は、こうあからさまに、誰それにも口を出させず、「こつそりと、い  
つから始まつたともなく運びたい」と初めからお考えになつていたことな  
ので、

「お許しくださいならないならば、いつもいつも、このようにして過ごそう  
とお考えになりおつしやるが、この老女が、それぞれと相談しあつて、あ  
からさまにささやき、そうは言つても、浅はかで老いのひがみからか、お  
気の毒に見える。」

「第四段 大君、弁と相談する」

姫宮、お困りになつて、弁が参つたのでおつしやる。

「長年、世間の人と違つたご好意とばかりおつしやつていたのを聞いており、  
今となつては、何でもすつかりお頼み申して、不思議なほど親しくしてい  
たのですが、思つていたのと違つたお気持ちがあり、お恨みになるらし  
いのは困つたことです。世間の人のように夫を持ちたい身の上ならば、こ  
のような縁談も、どうしてお断りなどしまししょう。」

けれども、昔から思い捨てていた考えなので、とてもつらいことです。こ  
の妹君が盛りをお過ぎになるのも残念です。なるほど、このような住まい  
も、ただこの君のためにも不都合にばかり思われますが、ほんとうに亡き  
宮をお思い出し申し上げるお気持ちならば、同じようにお考えになつてく  
ださい。身を分けた妹に心の中はすべて譲つて、お世話申し上げたい気が  
するのです。やはり、このようによろしく申し上げてくださいね」

と、恥ずかしがっているが、望んでいることをおっしゃり続けたので、まことにおいたわしいと拝する。

「そのようにばかりは、以前にもご様子を拝見しておりますので、とてもよく申し上げましたが、そのようにはお考え改めることはできず、兵部卿宮のお恨みの、深さが増すようなので、またそれはそれで、とても十分に「後見申し上げたい」と申されています。それも願ってもないことです。ご両親がお揃いで、特別に、たいそうお心をこめてお育て申し上げなさるにしましても、とても、このようにめったにないご縁談ばかりも、続いて来ないでしょう。

恐れ多いことですが、このようにとても頼りなさそうなご様子を拝見すると、果てはどのようにおなりあそばすのだろうか、不安で悲しくばかり拝見してはいますが、将来のお心は分かりませぬけれど、お二方ともご立派で素晴らしいご運勢でいらっしゃったのだと、何はともあれお思い申し上げます。

故宮のご遺言に背くまいとお考えあそばすのはごもつともなことですが、それは、婿にふさわしい方がいらっしゃらず、身分の不釣合なことがありだろつとお考えになつて、ご忠告申し上げなかつたようなものではございませんか。

この殿の、そのようなお気持ちがありでしたら、お一方を安心してお残し申せて、どんなに嬉しいことだろうと、時々おっしゃっていました。身分相応に、愛する人に先立たれなかつた人は、身分の高い人も低い人も、思いの他に、とんでもない姿でさすらう例さえ多くあるようです。

それはみな憂き世の常のようですので、非難する人もございませぬ。まして、これほどに、特別に誂えたような方のご様子で、ご愛情も深くめつたにないようにならば、求婚申し上げなされるのを、むやみに振り切りなかつて、お考えおいていたように、出家の本願をお遂げなかつたとしても、そうかといつて雲や霞を食べて生きらえましようか」

などと、総じて言葉数多く申し上げ続けると、とても憎く気にくわないとお思ひになつて、うつ伏しておしまひになつた。

「第五段 大君、中の君を残して逃れる」

中の宮も、ひとごとながらおいたわしいご様子だわと、拝見なまつて、一緒にいつものようにお寝になつた。気がかりで、どのように対処しようか、と思われなさるが、わざとらしく引き籠もつて身をお隠しになる物蔭さえないお住まいなので、柔らかく美しい御衣を、上にお掛け申し上げなまつて、まだ暑いころなので、少し寝返りして臥せつていらつしやつた。

弁は、おっしゃつたことを客人に申し上げる。どうして、ほんとにこのように結婚を思い断つていらつしやるのだろう。聖めていらした方の側において、無常をお悟りになつたのか」とお思ひになると、ますます自分の心と似通つていふと思われるので、利口ぶつた憎い女とも思われぬ。

「それでは、物越しに会うのでも、今はとんでもないこととお考えなです。今夜だけは、お寝みになつていられる所に、こつそりと手引きせよ」

とおっしゃるので、気をつけて、他の女房を早く寝静めたりして、事情を知つていられる者同志は手筈をととのえる。

宵を少し過ぎたころに、風の音が荒々しく吹くと、頼りない邸の葎などは、きしきしと鳴る紛らわしい音に、人がこつそり入つていらつしやる音は、お聞きつけになるまい」と思つて、静かに手引きして入れる。

同じ所にお寝みになつていられるのを、不安だと思つが、いつものことなので、別々にはどうして申し上げられよう。ご様子も、はつきりとお見知り申していらつしやるだろう」と思つたが、少しもお眠りになることもできないので、ふと足音を聞きつけなまつて、そつと起き出しておしまひになつた。とても素早く這つてお隠れになつた。

無心に寝ていらつしやるのを、とてもお気の毒に、どのようにするのかと、胸がどきりとして、一緒に隠れたいと思つが、そのように立ち戻ることもできず、震えながら御覧になると、灯火がほのかに明る中に、桂姿で、いかにも馴れ馴れしく、几帳の帷子を引き上げて中に入ったのを、ひどくおいたわしくて、どのようにお思ひになつていられるだろう」と思ひながら、粗末な壁の面に、屏風を立てた背後の、むさ苦しい所にお座りになつた。

「将来の心積もりとして話しただけでも、つらいと思つていらつしやつたのを、まして、どんなに心外にお疎みになるだろう」と、とてもおいたわしく思つにつけても、すべてしつかりした後見もいなくて、落ちぶれている二



人の身の上の悲しさを思い続けなされると、今を限りと山寺にお入りになった父宮の夕方のお姿などが、まるで今のような心地がして、ひどく恋しく悲しく思われなされる。

「第六段 薫、相手を中の君と知る」

中納言は、独り臥していらっしやるのを、そのつもりでいたのかと嬉しくなつて、心をときめかしなされると、だんだんと違つた人であつたと分かる。「もう少し美しくかわいらしい感じが勝つていようか」と思われる。

驚いてあきれていらっしやるのを、なるほど、事情を知らなかつたのだと見えるので、とてもお気の毒でもあり、また思い返しては、隠れていらっしやる方の冷淡さが、ほんとうに情けなく悔しいので、この人をも他人のものにはしたくないが、やはりもともとのお持ちと違つたのが、残念で、一時の浅い気持ちだつたとは思われ申すまい。この場合は、やはりこのまま過して、結局、運命から逃れられなかつたら、こちらの宮と結ばれるのも、どうしてまつたくの他人でもないし」

と氣を静めて、例によつて、風情ある優しい感じでお話して夜をお明かしになつた。

老女連中は、十分にうまくいったと思つて、

「中の宮は、どいかにいらっしやるのだろう。不思議なことだわ」と、探し合つていた。

「いくら何でも、どいかにいらっしやるだろう」

などと言つた。

「総じていつも、拝見すると皺の延びる氣がして、素晴らしく立派でいつまでも拝見していたい」器量や態度を、どうして、とてもよそよそしくお相手申し上げていらっしやるのだろう。何ですか、これは世間の人が言うよつな、恐ろしい神様が、お憑き申しているのでしょうか」

と、齒は抜けて、憎たらしく言う女房がいる。また、

「まあ、縁起でもない。どんな魔物がお憑きになつているものですか。ただ、世間離れして、お育ちになつたようですから、このようなことでも、ふさわしくとりなして差し上げなされる人もなくていらっしやるので、体裁悪く、

思はずにはいらっしやれないのでしょうか。そのうち自然と押しお馴れなさつたら、きつとお慕い申し上げなされるでしょう」

などと話して、

「すべにうちとけて、理想的な生活におなりになつてほしい」

と言いながら寝入つて、いびきなどを、きまり悪いくらいにする者もいる。逢いたい人と過ごしたのではない秋の夜であるが、間もなく明けてしまつ氣がして、どちらとも区別することもできない優美なご様子を、自分自身でも物足りない氣がして、

「あなたも愛してください。とても情けなくつらいお方のご様子を、真似なさいますな」

などと、後の逢瀬を約束してお出になる。自分ながら妙に夢のように思われるが、やはり冷たい方のお気持ちを、もう一度見極めたいとの氣で、氣持を落ち着けながら、いつものように、出て来てお臥せりになつた。

「第七段 翌朝、それぞれの思い」

弁が参つて、

「ほんとうに不思議に、中の宮は、どいかにいらっしやるのだろう」

と言つのを、とても恥ずかしく思いがけないお気持ちで、どうしたことであつたのか」と思いながら横になつていらっしやつた。昨日おつしやつたことをお思い出しになつて、姫宮をひどい方だとお思い申し上げなされる。

すっかり明けた光を頼りにして、壁の中のおおるぎすが這い出しなすつた。恨んでいらっしやるだろうことがとてもお気の毒なので、お互いにもおつしやれない。

「奥ゆかしげもなく、情けないことだわ。今からは、油断できないものだわ」

と思ひ乱れていらっしやつた。

弁はあちらに参つて、あきれはてたお氣の強さをすっかり聞いて、まことにあまりにも思慮が深く、かわいげがないこと」と、氣の毒に思い呆然としていた。

「今までのつらさは、まだ望みの持てる氣がして、いろいろと慰めていたが、

昨夜は、ほんとうに恥ずかしく、身を投げてしまいたい気がする。お見捨てがたい気持ちで遣していかれたおいたわしさを察し申し上げるのは、また、一途に、わが身を捨てることもできません。好色がましい気持ちは、どちらにもお思い申していません。悲しさも苦しさも、それぞれお忘れになられたくなく思います。

宮などが、立派にお手紙を差し上げなさるようですが、同じことなら気位高く、という考えが別におありなのだろう、と納得がいきましたので、まことにごもつともで恥ずかしくて。再び参上して、あなた方にお目にかかることもじゃくでね。よし、このように馬鹿らしい身の上を、また他人にお漏らしなさいませぬ」

と、恨み言をいって、いつもより急いでお出になった。」どなたにとつてもお気の毒で」と、ささやき合っていた。

「第八段 薫と大君、和歌を詠み交す」

姫君も、どうしたことだ、もしいい加減な気持ちがおありだったら、と胸が締めつけられるように苦しいので、何もかも、考えの違つ女房のおせつかいを、憎らしいとお思いになる。いろいろとお考えになっているところに、お手紙がある。いつもより嬉しく思われなさるのも、一方ではおかしなことである。秋の様子も知らないふりして、青い枝で、片一方はたいそう色濃く紅葉したのを、

「同じ枝を分けて染めた山姫を、こちらが深い色と尋ねましようか」

あれほど恨んでいた様子も、言葉少なく簡略にして、包んでいらつしやるが、何ともなしにつやむやにして済ますようだ」と御覧になるのも、心騒ぎして見る。

やかましく、お返事を「と言つので、差し上げなさい」と譲るのも、嫌な気がして、そうは言え書きにくく思い乱れなさる。

「山姫が染め分ける心はわかりませんが、変わりしたほつに深い思いを寄せているのでしよつ」

さりげなくお書きになっていたが、おもしろく見えたので、やはり恨みきれず思われる。

「身を分けてなどと、お譲りになる様子は、度々見えたが、承知しないのに困つて企てなかつたようだ。その効もなく、このように何の変化のないもお気の毒で、情けない人と思われて、ますます当初からの思いがかないがたいだろう。」

あれこれと仲立ちなどするような老女が思うところも軽々しく、結局のところ思慕したことさえ後悔され、このような世の中を思い捨てようとの考えに、自分自身もかなわなかつたことよと、体裁悪く思い知られるのに、それ以上に、世間でありふれた好色者の真似して、同じ人を繰り返し付きまとわるのも、まことに物笑いな柵無し小舟みたいだろう」

などと、一晚中思いながら夜を明かしなかつて、まだ有明の空も風情あるころに、兵部卿宮のお邸に参上なさる。

第三章 中の君の物語 中の君と匂宮との結婚

「第一段 薫、匂宮を訪問」

三条宮邸が焼けた後は、六条院に移つていらつしやつたので、近くていつも参上なさる。宮も、お望みどおりの思いでいらつしやるのであつた。雑事にかまけることもなく理想的なお住まいなので、お庭先の前裁が、他の所とは違つて、同じ花の恰好も、木や草の枝ぶりも、格別に思われて、遣水に澄んで映る月の光までが、絵に描いたようなところに、予想どおりに起きておいでになつた。

風に乗つて吹いてくる匂いが、たいそうはつきりと薫っているので、ふとその人と気がついて、お直衣をお召しになり、きちんとした姿に整えてお出ましになる。

階を昇り終えず、かしこまりなさつていらつしやつたので、近くともおつしやつらず、高欄に寄りかかりなさつて、世間話をし合ひなさる。あの辺りのことも、何かの機会にはお思い出しになつて、いろいろとお恨みになるのも無理な話である。自分自身の思いさえかかないがたいのに「と思ひながら、そつなつてくれればよい」と思つたようなことがあるので、いつも

よりは真面目に、打つべき手などを申し上げなされる。

明け方の薄暗いころ、折悪く霧がたちこめて、空の感じも冷え冷えと感  
じられ、月は霧に隔てられて、木の下も暗く優美な感じである。山里のし  
みじみとした様子をお思い出しになったのであろうか、

「近々のうちに、必ず置いておきなされるな」

とお頼みなされるのを、相変わらず、うるさがりそうにするので、

「女郎花が咲いている大野に人を入れまいと、どうして心狭く縄を張り廻ら  
しなされるのか」

と冗談をおっしゃる。

「霧の深い朝の原の女郎花は、深い心を寄せて知る人だけが見るのです。並  
の人には」

などと、悔しがらせなされると、

「ああ、うるさいことだ」

と、ついにはご立腹なされた。

長年このようにおっしゃるが、どのような方が気がかりに思っていたが、  
「器量などもがっかりなされることもないと推量されるが、氣立てが思つたほ  
どでないかも知れない」などと、ずっと心配に思っていたが、何事も失望  
させるようなところはおありでないようだ」と思うと、あの、おいたわし  
くも、胸の中にお計らいになつた様子と違うようなものも、思いやりがない  
ようだが、そうかといつて、そのようにまた考えを改めがたく思われるの  
で、お譲り申し上げて、どちらの恨みも負うまい」などと、心の底に思つ  
ている考えをご存知なくて、心狭いとおとりになるのも面白けれど、  
「いつもの、軽々しいご気性で、物思いをさせるのは、気の毒なことでしょう  
などと、親代わりになつて申し上げなされる。」

「よし、御覧ください。これほど心にとまつたことは、まだなかった」  
などと、実に真面目におっしゃるので、

「あのお二方の心には、それならと承知したような様子には見えませんでし  
た。お仕えしにくい宮仕えでございます」

と言つて、お出ましになる時の注意などを、こまごまと申し上げなされる。

「第二段 彼岸の果ての日、薫、匂宮を宇治に伴つ」

二十八日が、彼岸の終わりの日で、吉日だったので、こっそりと準備し  
て、ひどく忍んでお連れ申し上げる。后宮などがお聞きあそばしては、こ  
のようなお忍び歩きを厳しくお禁じ申し上げなされているので、まことに  
厄介であるが、たつてのお望みのことなので、気づかれないようにとお世  
話するのも、大変なことである。

舟で渡つたりするのも大げさなので、仰々しいお邸なども、お借りなさ  
らず、その辺りの特に近い御庄の人の家に、たいそうこっそりと、宮をお  
下ろし申し上げなされて、いらつしやた。お気づき申すような人もいない  
が、宿直人は形ばかり外に出て来るにつけても、様子を知らせまいとい  
うのであろう。

「いつもの、中納言殿がおいでです」と準備に回る。姫君たちは何となくわ  
ずらわしくお聞きになるが、心を変えていただくように言つておいたから」  
と、姫宮はお思いになる。中の宮は、思う相手はわたしではないようだか  
ら、いくら何でも」と思いながら、嫌な事があつてからは、今までのよ  
うに姉宮をお信じ申し上げなさらず、用心していらつしやる。

何やかやとご挨拶ばかりを差し上げなされて、どのようになることかと、  
女房たちも気の毒がつている。

宮には、お馬で、闇に紛れてお出ましいたいて、弁を召し出して、  
「こちらに、ただ一言申し上げねばならないことがございますが、お嫌いな  
さつた様子を拝見してしまつたので、まことに恥ずかしいが、いつまでも  
引き籠もつていられそうにないので、もう暫く夜が更けてから、以前のよ  
うに手引きしてくださいませんか」  
などと、率直にお頼みになると、どちらであつても同じことだから「な  
どと思つて参上した。」

「第三段 薫、中の君を匂宮にと企む」

「これこれです」と申し上げると、そうであつたか、思いが変わつたのだ  
わ」と、嬉しくなつて心が落ち着き、あのお入りになる道ではない廂の障  
子を、しっかりと施錠して、お会いなさつた。

「一言申し上げねばならないが、また女房に聞こえるような大声を出すのは具合が悪いから、少しお開けくださいませ。まことにうつつとつしい」

と申し上げなさるが、

「とてもよく聞こえまじょう」

と言つて、お開けにならない。今はもう心が変わったのを、挨拶なしではと思つて言うのであるうか。何の、今初めてお会いするのでもないし、不愛想に黙つていないで、夜を更かすまい」などと思つて、そのもとまでお出になつたが、障子の間からお袖を捉えて引き寄せて、ひどく恨むので、ほんとに嫌なことだわ。どうして言うことを聞いたのらう」と、悔やまれ厄介だが、なだめすかして向こうへ行かせよう」とお考えになつて、自分同様に思いくださるうに、それとなくお話なさる心配りなど、まことにいじらしい。

宮は、教え申し上げたとおり、先夜の戸口に近寄つて、扇を鳴らしなさると、弁が参つてお導き申し上げる。先々も物馴れした道案内を、面白いとお思いになりながらお入りになつたのを、姫宮は「存知なく、言いなだめて入れよう」とお思いになつていた。

おかしくもお気の毒にも思われて、内々にまつたく知らなかつたことを恨まれるのも、弁解の余地のない気がするにちがいないので、

「宮が後をついていらしたので、お断りするのでもできず、ここにいらつしやいました。音も立てずに、紛れ込みなかつた。この利口ぶつた女房は、頼み込まれ申したのらう。中途半端で物笑いにもなつてしまいそうだな」とおつしやるので、今一段と意外な話で、目も眩むばかり嫌な氣になつて、

「このように、万事変なことを企みなさるお方とも知らず、何ともいいようのない思慮の浅さをお見せ申してしまつた至らなさから、馬鹿にしていらつしやるのですね」

と、何とも言いようもなく後悔していらつしやつた。

「第四段 薫、大君の寢所に迫る」

「今はもう言つてもしかたありません。お詫びの言い訳は、何度申し上げて

も足りなければ、抓ねるでも捻るでもなさつてください。高貴な方をお思ひのようですが、運命などというようなものは、まつたく思うようにいかないものでございますので、あの方のご執心は別のお方にございましたのを、お気の毒に存じられますが、思ひのかなわれないわが身こそ、置き場もなく情けのうございませ。

やはり、どうにもならぬこととお諦めください。この障子の錠ぐらいが、どんなに強くとも、ほんとうに潔癖であつたと推察いたす人もございますまい。案内人としてお誘いになつた方のご心中にも、ほんとうにこのように胸を詰まらせて、夜を明かしていようとは、お思ひになるでしょうか」と言つて、障子を引き破つてしまいそうな様子なので、何ともいいようもなく不愉快だが、なだめすかそうと落ち着いて、

「そのおつしやる方面のこと、運命というものは、目にも見えないものなので、どのようにもこのようにも分かりません。行く先の知れない涙ばかり曇る心地がします。これはどのようになさるおつもりかと、夢のように驚いていますが、後世に話の種として言い出す人があつたら、昔物語などに馬鹿な話として作り出した話の例に、なつてしまいそうです。このようにお企みになつたお心のほどを、どうしてだつたのかとご推察なさるでしょう。やはり、とてもこのように、恐ろしいほどの辛い思いを、たくさんさせてお迷わしなさいませ。思ひの外に生き永らえたたら、少し気が落ち着いてからお相手申し上げます。気分も真暗な氣になつて、とても苦しいが、ここで少し休みます。お放しください」

と、ひどく困つていらつしやるので、それでも道理を尽くしておつしやるのが、気恥ずかしくいたわしく思われて、

「あなた様、お気持ちに添うことを類なく思つているので、こんなにまで馬鹿者のようになつております。何とも言えないくらい憎み疎んじていらつしやるようなので、申し上げようもありません。ますますこの世に跡を残すことも思われませぬ」と言つて、それでは、物を隔てたままですが、申し上げさせていただきまじょう。一途に、お捨てあそばしなさいませぬ」

と言つて、お放し申されたので、奥に這い入つて、とはいつても、すつかりお入りになつてしまうこともできないのを、まことにいたわしく思つて、これだけのおもてなしを慰めとして、夜を明かしまじょう。決して、決

して」

と申し上げて、少しもまどろまず、激しい水の音に目も覚めて、夜半の嵐に、山鳥のような気がして、夜を明かしかねさる。

「第五段 薫、再び実事なく夜を明かす」

いつもの、明けゆく様子に、鐘の音などが聞こえる。眠っていてお出になるような様子もないな」と、妬ましくて、咳払いなさるのも、なるほど妙なことである。

「道案内をしたわたしがかえって迷ってしまいそうです。満ち足りない気持ちで帰る明け方の暗い道を。このような例は、世間にあつたでしょうかと」

とおっしゃる。

「それぞれに思い悩むわたしの気持ちを思ってみてください。自分勝手に道にお迷いならば」

と、かすかにおっしゃるのを、まことに物足りない気がするのです。何とも、すっかり隔てられているようなので、まことに堪らない気持ちです。

などと、いろいろと恨みながら、ほのぼのと明けてゆくころに、昨夜の方角からお出になる様子である。たいそう柔らかく振る舞っていらつしやる所作など、色めかしいお心用意から、何ともいえなくらい香をたきこめていらつしやうた。老女連中は、まことに妙に合点がゆかず戸惑っていたが、それはいつても悪いようにはなさるまい」と慰めていた。

暗いうちにと、急いでお帰りになる。道中も、帰途はたいそう遙か遠く思われなされて、気軽に行き来できそうにないことが、今からとてもつらいので、夜を隔てられようかと」と思い悩んでいらつしやるようである。まだ人が騒々しくならない朝のうちにお着きになった。廊にお車を寄せてお下りになる。異様な女車の恰好をしてこつそりとお入りになるにつけても、皆お笑いになつて、

「いい加減でない宮仕えのお気持ちと存じます」

と申し上げなさる。道案内の馬鹿らしさを、まことに悔しいので、愚痴を申し上げるお気にもならない。

「第六段 匂宮、中の君へ後朝の文を書く」

宮は、早々と後朝のお手紙を差し上げなさる。山里では、大君も中の君も現実のような気がなさらず、思い乱れていらつしやうた。いろいろと企んでいらしたのを、顔にも出さなかつたことよ」と、疎ましくつらく、姉宮をお恨み申し上げなされて、お目も合わせ申し上げなさらない。ご存知なかつた事情を、さつぱりと弁明おできになれず、もつともなごととお気の毒にお思い申し上げなさる。

女房たちも、どういふこととございましたか」などと、ご機嫌を伺うが、果然とした状態で、頼りとする姫宮がいらつしやるので、不思議なことだわ」と思い合つていた。お手紙を紐解いてお見せ申し上げなさるが、全然起き上がりなさらないので、たいへん時間がたちます」とお使いの者は困つていた。

「世にありふれたことと思つていらつしやるのでしょうか。露の深い道の笹原を分けて来たのですが」

書き馴れていらつしやる墨つきなどが、格別に優美なものも、一般のお付き合いとして御覧になつていた時は、素晴らしく思われたが、気がかりで心配事が多くて、自分が出しやばつてお返事申し上げるのも、とても気が引けるので、一生懸命に、書くべきことを、じっくりと言ひ聞かせてお書かせ申し上げなさる。

紫苑色の細長一襲に、三重襲の袴を添えてお与えになる。お使いが迷惑そうにしているので、包ませて、お供の者に贈らせなさる。大げさなお使いでもなく、いつもお差し上げなさる殿上童なのである。特別に、人に気づかれまいとお思ひになつていたので、昨夜の利口ぶつていた老女のしわざであつたよ」と、嫌な気がなつたのであつた。

「第七段 匂宮と中の君、結婚第二夜」

その夜も、あの道案内をお誘いになつたが、冷泉院にせひとも伺候しなければならぬことがございますので」と言つて、お断りになつた。例に

よって、何かにつけ、この世に関心のないように振る舞う」と、憎くお恨みになる。

「仕方がない。願わなかつた結婚だからといって、いい加減にできようか」とお思い弱りになって、お部屋飾りなど揃わない住居だが、それはそれとして風流に整えてお待ち申し上げなさるのであった。はるばるとご遠路を急いでいらつしやつたのも、嬉しいことであるが、また一方では不思議なことに、濃いお召し物がひどく濡れるので、しっかりした方もふとお泣きになりながら、

「この世にいつまでも生きていられるとも思われませんので、明け暮れの考へ事にも、ただあなたのお身の上だけがおいたくお思い申し上げていますが、この女房たちも、結構な縁組だと聞きにくいまで言っているようなので、年をとつた女房の考へには、そうはいつでも、世間の道理をも知っているだろう。

はかばかしくもない私一人の我を張つて、こうしてばかりして、お置き申してよいものか、と思うようなこともありましたが、今はすぐにも、このように思いもかけず、恥ずかしい思いで思い乱れようとは、全然思つてもおりませんでした。これは、なるほど、世間の人が言うように逃れ難いお約束事だったのでしよう。まことに、つらいことです。少しお気持ちがお慰みになつたら、何も知らなかつた事情も申し上げます。憎いと、お恨みなさいませぬ。罪をお作りになつては大変ですよ」

と、御髪を撫でつくりながら申し上げなされると、お返事もなさらないが、そうはいつても、このようにおつしやること、なるほど、心配で悪かれとはお考へであるまいから、物笑いに見苦しいことが加わつて、お世話をおかけ申してはたいへんなことを、いろいろと考へていらつしやつた。そのような考へもなく、びつくりしていらつしやつた態度でさえ、並々ならず美しかったのだが、まして少し世間並になよよとしていらつしやるのは、お気持ちも深まつて、簡単にお通いになることができない山道の遠さを、胸が痛いほどお思いになつて、心をこめて将来をお約束になるが、嬉しいとも何ともお分かりにならない。

言いようもなく大事にされている良家の姫君も、もう少し世間並に接し、

親や兄弟などといつては、異性のすることを見慣れていらつしやる方は、何かの恥ずかしさや、恐ろしさもほどほどのことであろう。邸内に大切に世話申し上げる人はいないが、このような山深いご身辺なので、世間から離れて、引つ込んでお育ちになつた方とて、思いもかけなかつた出来事が、きまり悪く恥ずかしくて、何事も世間の人に似ず、妙に田舎人めいているだろう。ちよつとしたお返事も口のききようがなくて遠慮していらつしやつた。とはいへ、この君は利発で才気あふれる美しさは優つていらつしやつた。

#### 「第八段 勾宮と中の君、結婚第三夜」

「三日に当たる夜は、餅を召し上がるものです」と女房たちが申し上げるので、特別にしなければならぬ祝いなのだ」とお思いになつて、御前でお作らせなさるのも、分らないことばかりで、一方では親代わりになつてお命じになるのも、女房がどう思つかとつい気が引けて、顔を赤らめていらつしやる様子、まこと美しい感じである。姉のせいでは、おつとりと高いが、妹君のためにしみじみとした情愛があたりであった。

中納言殿から、

「昨夜、参ろうと思つておりましたが、せつかくご奉公に励んでも、何の効もなさそうあなた様なので、恨めしく存じます。

今夜は雑役でもと存じますが、宿直所が体裁悪くございました気分が、ますますよろしくなく、ぐずぐずいたしております」

と、陸奥紙にきちんとお書きになつて、準備の品々を、こまごまと、縫いなどしてない布地に、色とりどりに巻いたりして、御衣櫃をたくさん懸籠に入れて、老女のもとに、女房たちの用に」といつてお与えになつた。宮の御方のもとにあつた有り合わせの品々で、たいして多くはお集めになれなかつたのであろうか、加工してない絹や綾などを、下に隠し入れて、お召し物とおぼしき二領。たいそう美しく加工してあるのを、単重の御衣の袖に古風な趣向であるが、

「小夜衣を着て親しくなつたとは言いませんが、いいがかりくらいはつけないでもありません」

と、脅し申し上げなかつた。

この方あの方とも、奥ゆかしさをなくした御身を、ますます恥ずかしくお思いになって、お返事をどのように申し上げようかと、お困りになっている時、お使いのうち何人かは、逃げ隠れてしまったのであった。卑しい下人を呼びとめて、お返事をお与えになる。

「隔てない心だけは通い合いましうとも、馴れ親しんだ仲などとはおっしゃらないでください」

「氣ぜわしくいろいろと思ひ悩んでいらつしやうた後のために、ますますいかにも平凡なのを、お心のままと、待つて御覧になる方は、ただしみじみとお思いになられる。」

#### 第四章 中の君の物語 匂宮と中の君、朝ぼらけの宇治川を見る

「第一段 明石中宮、匂宮の外出を諫める」

宮は、その夜、内裏に参りなさつて、退出しがたそうなのを、ひそかにお心も上の空でお嘆きになっていたが、中宮が、

「依然として、このように独身でいらして、世間に、好色でいらつしやる。評判がだんだんと聞こえてくるのは、やはり、とてもよくないことです。何事にも風流が過ぎて、評判を立てるようなことをなさいませぬ。主上も不安にお思いおつしやっています」

と、里住みがちでいらつしやるのをお諫め申し上げなされると、まことに辛いとお思いになって、御宿直所にお出になって、お手紙を書いて差し上げなされたその後も、ひどく物思いに耽つていらつしやるところに、中納言の君が参上なされた。

あの姫君のお味方とお思いになると、いつもより嬉しくて、  
「どつしやう。とてもこのように暗くなつてしまつたよつだが、気がいらいらつて」

と、嘆かしくお思いになっていた。よくご本心をお確かめ申したい」とお思いになつて、

「久しぶりに、こつして参内なされたのに、今夜伺候あそばさないで、急い

で退出なされるのは、ますますけしからぬこととお思いあそばしませう。台盤所の方で伺つたところ、ひそかに、厄介なご用をお勤め申したために、受けなくてもよいお叱りもございませうかと、顔が青くなりました」  
と申し上げなされると、

「まことに聞き憎いことをおっしゃいますね。多くは誰かが中傷するのでしやう。世間から非難を受けるような料簡は、どうして、起こそうか。窮屈なご身分など、かえつてないほうがましだ」

とおつしやうて、ほんとうに厭わしくさえお思いであつた。

お気の毒に押しなさつて、

「同じく不興でいらつしやいませう。今夜のお咎めは代わり申し上げて、我が身をも滅ぼしましょう。木幡の山に馬はいかがでございませう。ますます世間の噂が避けようもないでしょう」

と申し上げなされるので、ただもうすっかり暮れて更けてしまつた夜なので、お困りになつて、お馬でお出かけになつた。

「お供は、かえつていたしますまい。後始末をしよう」と言つて、この君は内裏にお残りになる。

「第二段 薫、明石中宮に對面」

中宮の御方に参上なされると、

「宮はお出かけになつたそうな。あきれて困つたお方ですこと。どのように世間の人はお思い申すことでしょう。主上がお耳にあそばしたら、ご注意申し上げないのがいけないのだ、とお考えになり仰せになるのが耐えられませぬ」

と仰せになる。大勢の宮たちが、このようにご成人なされたが、大宮は、ますます若く美しい感じが、優つていらつしやるのであつた。

「女の宮も、このように美しくいらつしやるようである。どのような機会に、この程度にお側近く、お声だけでもお聞きいたしたい」と、しみじみと思われる。好色な男が、けしからぬ料簡を起こすのも、このようなお間柄で、そうはいつでも他人行儀でなく出入りして、思いどおりにできないことなのだろう。」

自分のように、偏屈な性分は、他に世にいるだろうか。なのに、やはり心動かされた女は、思い切ることができないのだ」

などと思つていらつしやうた。お仕えしているすべての女房の器量や氣立ては、どの人となく悪い者はなく、無難でそれぞれに美しい中に、上品で優れて目にとまるのもいるが、全然乱れまいとの氣持ちで、まことに生真面目に振る舞つていらつしやうた。わざと氣を引いてみる女房もいる。

だいたいが氣後れするような、沈着に振る舞つていらつしやる所なので、表面はしとやかにしているが、人の心はさまざまなので、色つばい性分の本心をちらちらと見せるのもいるが、人それぞれにおもしろくもあり、いとおしくもあるなあ」と、立つても座つても、ただ世の無常を思い續けていらつしやる。

### 「第三段 女房たちと大君の思い」

あちらでは、中納言殿が仰々しくおつしやうたのを、夜の更けるまでいらつしやらず、お手紙のあるのを、やはりそうであつたか」と胸をつぶしておいでになると、夜半近くなつて、荒々しい風に競うようにして、たいそう優雅で美しく匂つていらつしやうたのも、どうしていい加減に思われなさるう。

「ご本人も、わずかにうちとけて、お分かりになることがきつとあるにちがいない。たいそう美しく女盛りと見えて、ひきつくろつていらつしやる様子は、この方以上の方があつるか」と思われる。

あれほど美しい人を数多く御覧になつてはお目にさえ、悪くはないと器量をはじめとして、多く近勝りして思われなさるので、山里の老女連中は、まして慎みなく相好を崩して微笑しながら、

「このように惜しい様子を、並の身分の男性がお世話申し上げなさるようになつたら、どんなに口惜しいことでしょう。思いどおりの運勢を」と申し上げながら、姫宮のご性格を、妙な偏屈者のようにお振る舞いなさるのを、悪しざまに口をとがらせてご非難申し上げる。

盛りを過ぎた身なのに、派手な花の色とりどりや、似つかわしくないのを縫いながら、身にもつかずめかしこんでいる女房連中の姿が、見られた

者もないのを見渡しなつて、姫宮は、

「わたしもだんだん盛りを過ぎた身だわ。鏡を見ると、痩せ痩せになつてゆく。めいめいは、この女房連中も、自分自身を醜いと思つていようか。後ろ姿は知らない顔で、額髪をかき上げながら、化粧した顔づくろいをよくして振る舞つていようだ。自分の身としては、まだあの女房ほどは醜くはない。目鼻だちも尋常だと思われるのは、うぬぼれであるうか」

と不安で、外を眺めながら臥せつていらつしやうた。氣後れするような方と結婚することは、ますますみつともなく、もう一、二年したらいつそ衰えよう。頼りない身の上を」と、お腕が細つそりとして弱々しく、痛々しいのをさし出してみても、世の中を思い續けなさる。

### 「第四段 匂宮と中の君、朝ぼらけの宇治川を見る」

匂宮は、めつたにないお暇のほどをお考えになると、やはり、氣軽にできそうにないことだ」と、胸が塞がつて思われなさるのであつた。大宮が「注意申し上げなつたことなどをお話し申し上げなつて、

「愛していながら途絶えがあるうが、どうしたことなのか、とお案じなさるな。かりそめにも疎かに思つたら、このようには参りません。心の中をどうかしらと疑つて、お悩みになるのがお氣の毒で、身を捨てて参つたのです。いつもこのようには抜け出すことはできないでしょう。しかるべき用意をして、近くにお移し申しましよう」

と、とても心をこめて申し上げなさるが、絶え間がきつとあるように思われなさるのは、噂に聞いたお心のほどが現れたのかしら」と疑われて、ご自身の頼りない様子を思うと、いろいろと悲しいのであつた。

明けてゆく空に、妻戸を押し開けなつて、一緒に誘つて出て御覧になると、霧の立ちこめた様子、場所柄の情趣が多く加わつて、例の、柴積み舟がかすかに行き来する跡の白波、見慣れない住まいの様子だなあ」と、物事に感じやすいお心には、おもしろく思われなさる。

山の端の光がだんだんと見えるころに、女君のご器量が整つていてかわいらしくて、この上なく大切に育てられた姫君も、これほどでいらつしやるうか。氣のせいで、こちらの身内の方がとても立派に思われる。きめ濃や



かな美しさなどは、気を許して見ていたく、かえって堪えがたい気がする。水の音が騒がしく、宇治橋がたいそう古びて見渡されるなど、霧が晴れてゆくと、ますます荒々しい岸の辺りを、このような所に、どのようにして年月を過ごしてこられたのだろうか」などと、涙ぐんでおっしゃるのを、まことに恥ずかしいとお聞きになる。

男君のご様子が、この上なく優雅で美しく、この世だけでなく来世まで夫婦のお約束申し上げなされるので、思い寄らなかつたこととは思ひながら、かえって、あの目馴れた中納言の恥ずかしさよりは「と思われなさる。」あの方は愛する方が別にいて、とてもたいそう澄ましていた様子が、会うのも気づまりであつたが、お噂だけでお思い申し上げていた時は、いつそうこの上なく遠くに、一行お書きになるお返事でさえ。氣後れしたが、久しく途絶えなさることは、心細いだらう」

と思われるのも、我ながら嫌など、思い知りなさる。

「第五段 匂宮と中の君和歌を詠み交して別れる」

お供の者たちがひどく咳払いをしてお促し申し上げるので、京にお着きになる時刻が、みっともなくないころにと、たいそう氣ぜわしそつに、心にもなく来られない夜もあるうことを、繰り返し繰り返しおっしゃる。

「中が切れようとするのでないのに、あなたは独り敷く袖は夜半に濡らすことだろつ」

歸りにくく、引き返しては躊躇していらつしやる。

「切れないようにとわたしは信じては、宇治橋の遙かな仲をずつとお待ち申しましよつ」

口には出さないが、何となく悲しいご様子は、この上なくお思いなさるのであつた。

若い女性のお心にしみるにちがいない、世にも稀な朝帰りのお姿を見送つて、後に残っている御移り香なども、人知れずなにやらせつない氣がするのは、機微の分かるお心だこと。今朝は、物の見分けもつく時分なので、女房たちが覗いて拝する。

「中納言殿は、優しく恥ずかしい感じが、加わつた方であつた。氣のせいか、

もう一段尊い身分なので、この方のお姿は、まことに格別で」

などと、お誉め申し上げる。

道すがら、お氣の毒であつたご様子をお思い出しになりながら、引き返したく、体裁悪くまでお思いになるが、世間の評判を我慢してお帰りあそばすことなので、たやすくお出かけになることはおできになれない。

お手紙は毎日毎日に、たくさん書いて差し上げなされる。いい加減なお氣持ちではないのでは「と思ひながら、訪れない日数が続くのを、まことに心配の限りを尽くすことはしまいと申つていたが、自分のこと以上においたわしいことだわ」と、姫宮はお悲しみになるが、ますますこの妹君がお悲しみに沈んでいらつしやるうことから、平静を装つて、自分自身でさえ、やはりこのような心配を増やすまい」と、ますます強くお思いになる。

中納言の君も、待ち遠しくお思いだらう」と想像して、自分の責任からおいたわしくて、宮をお促し申し上げながら、絶えずご様子を御覧になると、たいそうひどく打ち込んでいらつしやる様子なので、そうはいつてもと、安心であつた。

「第六段 九月十日、薫と匂宮、宇治へ行く」

九月十日のころなので、野山の様子も自然と想像されて、時雨めいて暗くなり、空のむら雲が恐ろしそうな夕暮に、宮はますます落ち着きなく物思いに耽りなまつて、どうしようかと、ご自身では決心をしかねていらつしやる。そのところを推量して、参上なまつた。ふるの山里はどうでしよつか」と、お誘い申し上げなされる。まことに嬉しいとお思いになつて、一緒にお出かけになるので、例によって、一車に相乗りしてお出かけになる。分け入りなされるにつれて、まして物思いしているだろつ心中を、ますますご想像される。道中も、ただこのことのお氣の毒をお話し合ひなされる。黄昏時のひどく心細いうえに、雨が冷たく降り注いで、秋の終わる氣色がぞつとする感じなので、しつとりと濡れていらつしやるお二方の芳氣はこの世のものに似ず優艶で、連れ立っていらつしやるのを、山賤連中は、どうしてうろたえぬことがあるうか。

女房らは、日頃ぶつぶつ言っていたが、そのあとかたもなくにこにことし

て、ご座所を整えたりなどする。京に、しかるべき家々に散り散りになっていた娘連中や、姪のような人を、二、三人呼び寄せて仕えさせていた。長年軽蔑申し上げてきた思慮の浅い人びとは、珍しい客人と思つて驚いていた。姫宮も、ちよつとよい折柄と嬉しくお思い申し上げなさるが、利口ぶつた方が一緒にいらつしやるのが、気恥ずかしくもあり、何となく厄介にも思つが、人柄がゆつたりと慎重でいらつしやるので、なるほど、宮はこのようではおいででない」とお見比べなさると、めつたにない方だと思ひ知られる。

「第七段 薫、大君に對面、実事なく朝を迎える」

宮を、場所柄によつて、とても特別に丁寧に迎え入れ申し上げて、この君は、主人方に気安く振舞つていらつしやるが、まだ客人席の臨時の間に遠ざけていらつしやるので、まことにつらいと思つていらつしやうた。お恨みなさるのも、そうはいつでもお気の毒で、物越しにお会いなさる。

「冗談ではありませんね。こつしてばかりいられますしやうか」と、ひどくお恨み申し上げなさる。だんだんと道理をお分かりになつてきたが、妹のお身の上についても、物事をひどく悲觀なさつて、ますますこのような結婚生活を嫌なものとなつかり思いきつて、

「やはり、一途に、何とかこのようにはうちとけまい。うれしいと思つた方のお気持ちも、きつとつらいと思つたにちがいないことがあるだろう。自分も相手も幻滅したりせずに、もとの気持ちを失わずに、最後までいたいものだわ」

と思つ考えが深くおなりになつていた。

宮のご様子などをお尋ね申し上げなさると、ちやうどほめかじつ、そのうであつたのか」とお思いになるようによつしやるので、お気の毒になつて、「執心の様子や、態度を窺つていることなどを、お話し申し上げなさる。いつもよりは素直にお話しになつて、

「やはり、このように物思ひの多いころを、もう少し気持ちが落ち着いてからお話し申し上げまじやう」

とおつしやる。小憎らしくよそよそしくは、あしらわないものの、襖障

子の戸締りもとても固い。無理に突破するのは、辛く酷いこと」とお思いになつていたので、お考えがおありなのだろう。軽々しく他人になびきなされるようなことは、また決してあるまい」と、心のおつとりした方は、そうはいつても、じつによく気を落ち着かせなさる。

「ただ、とても頼りなく、物を隔てているのが、満足のゆかない気がしますよ。以前のようにお話し申し上げたい」

と責めなさると、

「いつもよりも自分の容貌が恥ずかしいころなので、疎ましいと御覽になるのも、やはりつらく思われますのは、どうしたことでしょうか」

と、かすかにほほ笑みなさつた様子などは、不思議と慕わしく思われる。

「このようなお心にだまされ申して、終いにはどのような身の上だらうか」

と嘆きがちに、いつものように、遠山鳥で別々のまま明けてしまった。

宮は、まだ独り寝だるうとはお思いならず、

「中納言が、主人方でゆつたりとしている様子が羨ましい」  
とおつしやると、女君は、おかしなこととお聞きになる。

「第八段 匂宮、中の君を重んじる」

無理を押ししてお越しになつて、長くもいずにお帰りになるのが、物足りなくつらいので、宮はひどくお悩みになつていた。お心の中をご存知ないので、女方には、またどうなるのだらうか。物笑いになりはせぬか」と思つてお嘆きになると、なるほど、心底からおつらそうな」と見える。

京にも、こつそりとお移しになる家もさすがに見当たらない。六条院には、左の大殿が、一画にお住みになつて、あれほど何とかしたいとお考えの六の君の御事をお考えにならないので、何やら恨めしいとお思い申し上げていらつしやるようである。好色がましいお振舞いだと、容赦なくご非難申し上げなさつて、宮中あたりでもご愁訴申し上げていらつしやるようなので、ますます、世間に知られない人をお困いなさるのも、憚りがとても多かつた。

普通にお思ひの身分の女は、宮仕えの方面で、かえつて気安そうである。

そのような並の女にはお思いなされず、もし御世が替わつて、帝や后がお考えおいたままにでもおなりになつたら、誰よりも高い地位に立てよう」などと、ただ今のところは、たいそうはなやかに、心に懸けていらつしやるにつれて、して差し上げようともその方法がなくつらいのであつた。

中納言は、三条宮を造り終えて、しかるべき形をもつてお迎え申そうとお考えになる。

なるほど、臣下は気楽なのであつた。このようにたいそうお気の毒なご様子でありながら、気をつかつてお忍びになるために、お互いに思い悩んでいらつしやるようなのも、おいたわしくて、人目を忍んでこのようにお通いになつてゐる事情を、中宮などにもこつそりとお耳に入れあそばして、暫くの間のお騒がれは気の毒だが、女方のためには、非難されることもない。たいそうこのように夜をさえお明かしにならないつらさよ。うまさく計らつて差し上げたいものよ」

などと思つて、無理して隠さない。

「衣更など、てきぱきと誰がお世話するだろうか」などと心配なさつて、御帳の帷子や、壁代などを、三条宮を造り終えて、お移りになる準備をなさつていたのを、差し当たつて、入用がございまして」などと、たいそうこつそりと申し上げなさつて、差し上げなされる。いろいろな女房の装束、御乳母などにもご相談なさつては、特別にお作らせになつたのであつた。

## 第五章 大君の物語 匂宮たちの紅葉狩り

「第一段 十月朔日頃、匂宮、宇治に紅葉狩り」

十月上旬ごろ、網代もおもしろい時期だろうと、お誘い申し上げなさつて、紅葉を御覧になるよう申し上げなされる。側近の宮家の人びとや、殿上人で親しくなさつてゐる人だけで、たいそうこつそりと」とお思いになるが、たいへんなご威勢なので、自然と計画が広まつて、左の大殿の宰相中將も参加なされる。それ以外では、この中納言殿だけが、上達部としてお供なされる。臣下の者は多かつた。

あちらには、無論、休憩をなさるでしょうから、そのようにお考えください。昨年の春にも、花見に尋ねて参つた誰彼が、このような機会にごよせて、時雨の紛れに拝見するようなこともございましょう」などと、こまごまご注意申し上げなさつた。

御簾を掛け替え、あちらこちら掃除をし、岩陰に積もつてゐる紅葉の朽葉を少し取り除き、遣水の水草を払わせなどなされる。風流な果物や、肴など、手伝いに必要な者たちを差し上げなさつた。一方では奥ゆかしさも無いが、どうすることもできない。これも前世からの宿縁なのか」と諦めて、お心積もりしていらつしやつた。

舟で上つたり下つたりして、おもしろく合奏なさつてゐるのも聞こえる。ちらほらとその様子が見えるのを、そちらに立つて出て、若い女房たちは拝見する。ご本人のお姿は、その人と見分けることはできないが、紅葉を葺いた舟の飾りが、錦に見えるところへ、声々に吹き立てる笛の音が、風に乗つて仰々しいまでに聞こえる。

世人が追従してお世話申し上げる様子が、このようにお忍びの旅先でも、たいそう格別に盛んなのを御覧になるにつけても、なるほど、七夕程度であつても、このような彦星の光をお迎えしたいもの」と思われた。

漢詩文をお作らせになるつもりで、博士なども伺候してゐるのであつた。黄昏時に、お舟をさし寄せて音楽を奏しながら漢詩をお作りになる。紅葉を薄く濃くかざして、海仙楽」という曲を吹いて、それぞれ満足した様子であるが、宮は、近江の湖の気がして、対岸の方の恨みはどんなにかとばかり、上の空である。時節にふさわしい題を出して、朗誦し合つていた。

人びとの騒ぎが少し静まつてからおいでになるうと、中納言もお思いになつて、そのようにお話申し上げていらつしやつたところに、内裏から、中宮の仰せ言として、宰相の御兄君の衛門督が、仰々しい隨身を引き連れて、正装をして参上なさつた。このようなご外出は、こつそりなさるうとして、自然と広まつて、後の例にもなることなので、重々しい身分の人も大していなくて、急にお出かけになつたのを、お耳にあそばしびつくりして、殿上人を大勢連れて参つたので、具合悪くなつてしまつた。宮も中納言も困つたとお思いになつて、遊樂の興も冷めてしまつた。ご心中を知らないで、酔い乱れて遊び明かした。

「第二段 一行、和歌を唱和する」

今日は、このままとお思いになるが、また、宮の大夫、その他の殿上人などを、大勢差し上げなさっていた。気ぜわしく残念で、お帰りになる気もしない。あちらにはお手紙を差し上げなさる。風流なこともなく、たいそう真面目に、お思いになつていたことを、こまごまと書き綴りなさつていたが、「人目が多く騒がしいだろう」とて、お返事はない。

「人数にも入らない身の上では、ご立派な方とお付き合ひするのは、詮ないことであつたのだ」と、ますますお思い知りなさる。逢わずに過す月日は、心配も道理であるが、いくら何でも後にはなどと慰めなさるが、近くで大騒ぎしていらして、何もなくて去つておしまいになるのが、つらく残念にも思い乱れなさる。

宮は、それ以上に、憂鬱でやるせないとお思いになること、この上ない。網代の氷魚も心寄せ申して、色とりどりの木の葉にのせて賞味なさるを、下人などはまことに美しいことと思つているので、人それぞれに従つて、満足しているようなご外出に、ご自身のお気持ちは、胸ばかりがいつぱいになつて、空ばかりを眺めていらつしやるが、この故宮邸の梢は、たいそう格別に美しく、常磐木に這いかかつている鶯の色なども、何となく深味があつて、遠目にさえ物淋しそうなのを、中納言の君も、「なまじご依頼申し上げなさつていたのが、かえつてつらいことになつたな」と思われる。

去年の春、お供した公達は、花の美しさを思い出して、先立たれてここで悲しんでいらつしやるだろ心細さを噂する。このように忍び忍びにお通いになると、ちらつと聞いている者もいるのであろう。事情を知らない者も混じつて、だいたいが何やかやと、人のお噂は、このような山里であるが、自然と聞こえるものなので、

「とても素晴らしくいらつしやるそうだな」

「箏の琴が上手で、故宮が明け暮れお弾きになるようしつつけていらしたので、などと、口々に言う。」

宰相中将が、

「いつだったか花の盛りに一目見た木のもとまで、秋はお寂しいことではなう。」

主人方と思つて詠みかけてくるので、中納言は、

「桜は知つていられるでしょう。咲き匂う花も紅葉も常ならぬこの世を」

衛門督、

「どこから秋は去つて行くのでしょうか。山里の紅葉の蔭は立ち去りにくいの」

宮の大夫、

「お目にかかつたことのある方も亡くなつた。山里の岩垣に気の長く這いかかつていられる鶯よ」

その中で年老いていて、お泣きになる。親王が若くいらつしやつた当時のことなどを、思い出したようである。

宮、

「秋が終わつて寂しさがまさる木のもとを、あまり烈しく吹きなさるな、峰の松風よ」

と詠んで、とてもひどく涙ぐんでいらつしやるのを、うすうす事情を知つていられる人は、

「なるほど、深いご執心なのだ。今日の機会をお逃しになるおいたわしさ」と押し上げる人もいるが、仰々しく行列をつくつては、お立ち寄りになることはできない。作つた漢詩文の素晴らしい所々を朗誦し、和歌も何やかやと多かつたが、このような酔いの紛れには、それ以上に良い作があるうはずがない。一部分を書き留めてさえ見苦しいものである。

「第三段 大君と中の君の思い」

あちらでは、お素通りになつてしまつた様子を、遠くなるまで聞こえる前駆の声を、ただならずお聞きになる。心積もりしていた女房も、まことに残念に思つていた。姫宮は、それ以上に、

「やはり、噂に聞く月草のような移り気なお方なのだわ。ちらちら人の言うのを聞くと、男というものは、嘘をよくつくという。愛していない人を愛している顔でだます言葉が多いものだ、この人数にも入らない女房連中が、昔話として言うのを、そのような身分の低い階層には、よくないこともあるのだらう。」

何事も高貴な身分になれば、人が聞いて思うことも遠慮されて、自由勝手には振る舞えないはずのものと思つていたのは、そうとも限らなかつたのだわ。浮気でいらつしやるように、故宮も伝え聞いていらつしやつて、このように身近な關係にまでは、お考えでなかつたのに。不思議なほど熱心にずつと求婚なさり続け、意外にも婿君として拜するにつけてさえ、身のつらさが思い加わるのが、つまらないことであるよ。

このように期待はずれの宮のお心を、一方ではあの中納言も、どのように思つていらつしやるのだらう。ここには特に立派そうな女房はいないが、それぞれ何と思うか、物笑いになつて馬鹿らしいこと

とお心を悩ましなされると、気分も悪くなつて、ほんとうに苦しく思われなされる。

ご本人は、たまにお会いなされる時、この上なく深い愛情をお約束なさつていたので、そうはいつても、すっかり「変心なされるまい」と、訪れがないのも、やむをえない支障が、おありなのだらう」と、心中に思い慰めなされることがある。

久しく日がたつたのを気になさらないこともないが、なまじ近くまで来ながら素通りしてお歸りになつたことを、つらく口惜しく思われるので、ますます胸がいっぱいになる。堪えがたいご様子なのを、

「世間並みの姫君にして上げて、ひとかどの貴族らしい暮らしならば、このようには、お扱いなされるまいものを」  
などと、姉宮は、ますますお気の毒にと押し上げなされる。

#### 「第四段 大君の思い」

「わたしも生き永らえたら、このようなことをきつと経験することだらう。中納言が、あれやこれやと言ひ寄りなされるのも、わたしの気を引いてみようとのつもりだつたのだわ。自分一人が相手になるまいと思つても、言い逃れるには限度がある。ここに仕える女房が性懲りもなく、この結婚をばかりを、何とか成就させたいと思つていようなので、心外にも、結局は結婚させられてしまふかもしれない。この事だけは、繰り返し繰り返し、用心して過ごしなさいと、ご遺言なされたのは、このようないことがあるう時

の忠告だつたのだわ。

このような、不幸な運命の二人なので、しかるべき親にもお先立たれ申したのだ。姉妹とも同様に物笑いになることを重ねた様子で、亡き両親までをお苦しめ申すのが情けないのを、わたしだけでも、そのような物思いに沈まず、罪などたいして深くならない前に、何とか亡くなりた

と思ひ沈むと、気分もほんとうに苦しいので、食べ物も少しも召し上げらず、ただ、亡くなつた後のあれこれを、明け暮れ思い続けていらつしやると、心細くなつて、この君をお世話申し上げなされるのも、とてもおいたわしく、

「わたしにまで先立たれなかつて、どんなにひどく慰めようがないことだらう。惜しくかわいい様子を、明け暮れの慰みとして、何とかして一人前にして差し上げたいと思つて世話するのを、誰にも言わず将来の生きがいと思つてきたが、この上ない方でいらつしやつても、これほど物笑いになつた目に遭つたような人が、世間に出てお付き合ひをし、普通の人のようにお過ごしになるのは、例も少なくつらいことだらう」

などとお考え続けると、何とも言いようなく、この世には少しも慰めることができなくて、終わつてしまひそうな二人らしい」と、心細くお思ひになる。

#### 「第五段 匂宮の禁足、薫の後悔」

宮は、すぐその後、いつものように人目に隠れてご出立なされたが、内裏で、

「このようなお忍び事によつて、山里へのご外出も、簡単にお考えになるのです。軽々しいお振舞いだと、世間の人も陰で非難申しているそつです」  
と、衛門督がそつとお耳に入れ申し上げなされたので、中宮もお聞きになつて困り、主上もますますお許しにならない御様子で、  
「だいたいが気まま放題の里住みが悪いのである」

と、厳しいことが出てきて、内裏にびつたりとご伺候させ申し上げなされる。左の大殿の六の君を、ご承知せず思つていらつしやることだが、無理にも差し上げなされるよう、すべて取り決められる。

中納言殿がお聞きになつて、他人事ながらどうにもならないと思案なさる。

「自分があまりに変わつていたのだ。そのようになるはずの運命であつたのだらうか。親王が不安であるところ心配になつていた様子も、しみじみと忘れがたく、この姫君たちのご様子や人柄も、格別なことはなくて世に朽ちてゆきなさることが、惜しくも思われるあまりに、人並みにして差し上げたいと、不思議なまでお世話せずにはいられなかつたところ、宮もあいにくに身を入れてお責めになつたので、自分の思いを寄せている人は別なのだが、お譲りなさるのもおもしろくないので、このように取り計らつてきたのに。」

考えてみれば、悔しいことだ。どちらも自分のものとしてお世話するのを、非難するような人はいないのだ」

と、元に戻ることはできないが、馬鹿らしく、自分一人で思い悩んでいらつしやる。

宮は、薫以上に、お心にかからない折はなく、恋しく気がかりだとお思ひになる。

「お心に気に入つてお思いの人がいるならば、ここに参らせて、普通通りに穏やかになさりなさい。格別なことをお考え申し上げておいであそばすのに、軽々しいように人がお噂申すようなのも、まことに残念です」

と、大宮は明け暮れご注意申し上げなさる。

「第六段 時雨降る日、匂宮宇治の中の宮を思う」

時雨がひどく降つてのんびりとした日、女一の宮の御方に参上なさつたところ、御前に女房も多く伺候して、ひっそりとして、御絵などを御覧になつて時である。

御几帳だけを隔てて、お話を申し上げなさる。この上もなく上品で気高い一方で、たおやかでかわいらしいご様子を、長年二人といないものとお思ひ申し上げなされて、

他に、このご様子に似た人がこの世にどうか。冷泉院の姫宮だけが、ご寵愛の深さや内々のご様子も奥ゆかしく聞こえるけれど、口に出すすべも

なくお思い続けていたが、あの山里の人は、かわいらしく上品なところは劣り申さない」

などと、まっさきにお思ひ出しになると、ますます恋しくて、気紛らわしに、御絵類がたくさん散らかつておられるのを御覧になると、おもしろい女絵の類で、恋する男の住まいなどが描いてあつて、山里の風流な家などやさまざまな恋する男女の姿を描いてあるのが、わが身につまされることが多くて、お目が止まりなさるので、少しお願ひ申し上げなされて、あちらへ差し上げたい」とお思ひになる。

在五中将の物語を絵に描いて、妹に琴を教えているところの、人の結ばむ」と詠みかけているのを見て、どのようにお思ひになつたのであろうか、少し近くにお寄りなされて、

「昔の人も、こつこつ間柄では、隔てなくしているものでございます。たいそうよそよそしくばかりおあしらいになるのがたまりません」

と、こつそりと申し上げなさると、どのような絵であるうか」とお思ひになると、巻き寄せて、御前に差し入れなさつたのを、うつ伏して御覧になる御髪がうねうねと流れて、几帳の端からこぼれ出ている一部分を、わずかに拝見なさるのが、どこまでも素晴らしく、少しでも血の遠い人とお思ひ申せるのであつたら」とお思ひになると、堪えがたくて、

「若草のように美しいあなたと共寝をしてみようとは思いませんが、悩ましく晴れ晴れしない気がします」

御前に伺候している女房たちは、この宮を特に恥ずかしくお思ひ申し上げて、物の背後に隠れていた。こともあろうに嫌な変なことを」とお思ひになつて、何ともお返事なさらない。もつともなことでも、考えもなく口を」と言つた姫君もふざけて憎らしく思われなさる。

紫の上が、特にこのお二方を仲よくお育て申されたので、大勢のご姉弟の中で、隔て心なく親しくお思ひ申し上げていらつしやう。又とないほど大切にお育て申し上げなされて、伺候する女房たちも、どこか少しでも欠点がある人は、恥ずかしそうである。高貴な人の娘などもとても多かつた。お心の移りやすい方は、新参の女房に、ちよつと物を言いかげなどなされては、あの山里辺りをお忘れになる時もない一方で、お訪ねなさることもなく数日がたつた。

「第一段 薫、大君の病氣を知る」

お待ち申し上げていらつしやる所では、長く訪れない気がして、やはり、「こつなのだ」と、心細く物思いに沈んでいらつしやるところに、中納言がおいでになった。「病氣でいらつしやると聞いての、お見舞いなのであった。ひどく気分が悪いという病氣ではないが、病氣にかこつけてお会いなさらない。

「びつくりして、遠くから参つたのに。やはり、あちらの病人のお側近く」

「と、しきりに心配申し上げなされるので、くつろいで休んでいらつしやるお部屋の御簾の前にお入れ申し上げる。まことに見苦しいこと」と迷惑がりなさるが、そつけなくはなく、お頭を上げて、お返事など申し上げなさる。

宮が、不意ながらお素通りになつた様子などを、お話し申し上げなされて、

「安心してください。いらいらなさつて、お恨み申し上げなさいませぬ」  
などとお諭し申し上げなされると、

「妹には、格別何とも申し上げなされないようです。亡き親の遺言はこのような事だつたのだ、と思われて、おかわいそうなのです」

と言つて、お泣きになる様子である。まことにおいたわしくて、自分までが恥ずかしい気がして、

「夫婦仲というものは、いずれにしても一筋縄でゆくことは難しいものです。いろいろなことをご存知ないお二方には、ひたすら恨めしいと思ひになることもあるでしょうが、じつと気長に考えなさい。不安はまつたくないと存じます」

などと、他人のお身の上まで世話をやくのも、一方では妙な思われなさる。

夜毎に、さらにとても苦しうになさつたので、他人がお側近くにいる感じも、中の宮が辛そうにお思ひになつていたので、

「やはり、いつものように、あちらに」

と女房たちが申し上げるが、

「いつもより、このように病氣でいらつしやる時が気がかりなので。心配のあまりに参上して、外に放つておかれては、とてもたまりませぬ。このような時の看病の指図も、誰がてきばきとお仕えできましようか」

などと、弁のおもとにご相談なさつて、御修法をいくつも始めるようにおつしやる。たいそう見苦しく、わざわざ捨ててしまいたいわが身なのに「と聞いていらつしやるが、相手の気持ちを顧みないかのように断るのもいやなので、やはり、生き永らえよと思つてくださるお気持ちもありがたく思われる。

「第二段 大君、匂宮と六の君の婚約を知る」

翌朝、少しはよくなりましたか。せめて昨日ぐらいにお話し申し上げたい」といふので、

「数日続いたせいか、今日はとても苦しくて。それでは、こちらに」とお伝えになつた。たいそうおいたわしく、どのような具合でいらつしやるのか。以前よりは優しい様子なのも、胸騒ぎして思われるので、近くに寄つて、いろいろのことを申し上げなされて、

「苦しくてお返事できません。少しおさまりましてから」  
と言つて、まことにか細い声で弱々しい様子を、この上なくおいたわしくて嘆いていらつしやつた。そうはいつても、所在なくこつしておいでになることもできないので、まことに不安だが、お歸りになる。

「このようなお住まいは、やはりお氣の毒です。場所を変えて療養なさるのにかこつけて、しかるべき所にお移し申そう」

などと申し上げおいて、阿闍梨にも、御祈祷を熱心にするようお命じになつて、お出になつた。

この君のお供の人で、早くも、ここにいる若い女房と恋仲になつていたのであつた。それぞれの話で、

「あの宮が、外出を禁じられなさつて、内裏にばかり籠もつていらつしやいます。左の大殿の姫君を、娶せ申しなさるらしい。女方は、長年のご本意なので、おためらいになることもなくて、年内にあると聞いている。

宮はしぶしぶとお思いで、内裏辺りでも、ただ好色がましいいことにご熱心で、帝や後の御意見にもお静まりそうもないようだ。

わたしの殿は、やはり人にお似にならず、あまりに誠実でいらして、人からは敬遠されておいでだ。ここにこうしてお越しになるだけが、目もくらむほどで、並々でないことだ、と人が申している。

などと話したのを、「そのように言っていた」などと、女房たちの中で話しているのをお聞きになると、ますます胸がふさがって、

「もうお終いだわ。高貴な方と縁組がお決まりになるまでの、ほんの一時の慰みに、こうまでお思いになったが、そうはいつても中納言などが思うところをお考えになって、言葉だけは深いのだった」

とお思いになると、とやかく宮のおつらさは考えることもできず、ますます身の置き場所もない気がして、落胆して臥せっていらつしやうた。

弱つたご気分では、ますます世に生き永らえることも思われない。気のおける女房たちではないが、何と申すかつらいので、聞かないふりをして寝ていらしたが、中の宮、物思ふ時のことと聞いていたうたた寝のご様子がたいそうかわいらしくて、腕を枕にして寝ていらつしやうるところに、お髪がたまっているところなど、めつたになく美しそうなものを見やりながら、親のご遺言も繰り返し繰り返し思い出されなうた悲しいので、

「罪深いという地獄には、よもや落ちていらつしやうまい。どこでもかしこでも、おいでになるところにお迎えください。このようにひどく物思いに沈むわたしたちをお捨てになって、夢にさえお見えにならないこと」とお思い続けなうた。

### 「第三段 中の君、昼寝の夢から覚める」

夕暮の空の様子がひどくぞつとするほど時雨がして、木の下を吹き払う風の音などに、たとえようもなく、過去未来が思い続けられて、添い臥していらつしやう様子、上品でこの上なくお見えになる。

白い御衣に、髪は梳くこともなさらず幾日もたつてしまつているが、まつわりつくことなく流れて、幾日も少し青くやつれていらつしやうのが、優美さがまさつて、外を眺めていらつしやう目もと、額つきの様子も、分か

る人に見せたいほどである。

昼寝の君は、風がたいそう荒々しいのを目を覚まされて起き上がりなうた。山吹襲に、薄紫色の袷などがはなやかな色合いで、お顔は特別に染めて匂わしたように、とても美しくあでやかで、少しも物思ひをする様子もなさつていない。

「故宮が夢に現れなうたが、とても心配そうな様子で、このあたりに、ちらちら現れなうた」

とお話しになると、ますます悲しさがつって、

「お亡くなりになって後、何とか夢にも拝したいと思うが、全然、拝見していません」

と言つて、お二方ともひどくお泣きになる。

「最近、明け暮れお思い出し申しているので、お姿をお見せになるかしら。何とか、おいでになるところへ尋ねて参りたい。罪障の深い二人だから」

と、来世のことまでお考えになる。唐国にあつたという香の煙を、本当に手に入れたくお思いになる。

### 「第四段 十月の晦、匂宮から手紙が届く」

たいそう暗くなつたところに、宮からお使いが来る。悲観の折とて、少し物思ひもきつと慰んだことであろう。御方はすぐには御覧にならない。

「やはり、素直におおらかにお返事申し上げなさい。こうして亡くなつてしまつたら、この方よりもさらにひどい目にお遭わせ申す人が現れ出て来ようか、と心配です。時たまで、この方がお思い出し申し上げなうたのに、そのようなとんでもない料簡を使う人は、いますまいと思うので、つらいけれども頼りにしています」

と申し上げなうた、

「置き去りにしていこうとお思いなのは、ひどいことです」

と、ますます顔を襟元にお入れになる。

「寿命があるので、片時も生き残つていまいと思つていたが、よくぞ生き永らえてきたものだった、と思つていますのよ。明日を知らない世が、そうはいつても悲しいのも、誰のために惜しい命がお分かりでしょう」



と言つて、大殿油をお召しになつて御覧になる。  
例によつて、こまやかにお書きになつて、

「眺めているのは同じ空なのに、どうしてこうも会いたい気持ちをつのらせる時雨なのか」

「このように袖を濡らした」などといつても書いてあつたのであるうか、耳慣れた文句なのを、やはりお義理だけの手紙と見るにつけても、恨めしさがおつのになる。あれほど類まれなご様子やご器量を、ますます、何とかして女たちに誉められようと、色つぼくしゃれて振る舞つていらつしやるので、若い女の方が心をお寄せ申し上げなされるのも、もっともなことである。時が過ぎるにつけても恋しく、あれほどたいそうなお約束なさつていたのだから、いくら何でも、とてもこのまま終わりになることはない」と考へ直す氣に、いつもなるのであつた。お返事は、「今宵帰参したい」と申し上げるので、皆が皆お促し申し上げるので、ただ一言、

「霰が降る深山の里は朝夕に、眺める空もかき曇つております」

「こうお返事したのは、神無月の晦日だつた。一月もご無沙汰してしまつたことよ」と、宮は氣が氣でなくお思いで、「今宵こそは、今宵こそは」と、お考へになりながら、邪魔が多く入つたりしているうちに、五節などが早くある年で、内裏辺りも浮き立つた氣分に取り紛れて、特にそのためではないが過ごしていらつしやるうちに、あきれほど待ち遠しくいらした。かりそめに女とお会いになつても、一方ではお心から離れることはない。左の大殿の縁談のことを、大宮も、

「やはり、そのような落ち着いた正妻をお迎えになつて、その他にいとしくお思ひになる女がいたら、参上させて、重々しくお扱いなさい」

と申し上げなされるが、  
「もう暫くお待ちください。ある考えている子細があります」

お断り申し上げなさつて、ほんとうにつらい目をどうしてさせられようか「などとお考へになるお心を存知ないので、月日とともに物思ひばかりなさつてゐる。」

「第五段 薫、大君を見舞う」

中納言も「思つたよりは軽いお心だな。いくら何でも」とお思ひ申し上げていたのも、お氣の毒に、心から思われて、めつたに参上なさらない。

山里には「お加減はいかがですか。いかがですか」と、お見舞い申し上げなされる。今月になつてからは、少し具合がよくいらつしやる」とお聞きになつたが、公私に何かと騒がしいころなので、五、六日人も差し上げられなかつたので、「どうしていらつしやるだろ」と、急に氣になりなすつて、余儀ないご用で忙しいのを放り出して参上なされる。

「修法は、病氣がすっかりお治りになるまで」とおつしやつておいたが、良くなつたといつて、阿闍梨をもお歸しになつたので、たいそう人少なので、例によつて、老女が出てきて、「ご容態を申し上げます。」

「どこそこ痛いところもなく、たいしたお苦しみでないご病氣なのに、食事を全然お召し上がりになりません。もともと、人と違つておいでで、か弱くいらつしやるうえに、こちらの宮のご結婚話があつて後は、ますますご心配なさつてゐる様子で、ちよつとした果物さえお見向きもなさらなかつたことが続いたためか、あきれほどお弱りになつて、まつたく見込みなさそうにお見えます。まことに情けない長生きをして、このようなことを拝見すると、まずは何とか先に死なせていただきたいと存じております」と、言い終わらずに泣く様子、もっともなことである。

「情けない。どうして、こうとお知らせくださらなかつたのか。院でも内裏でも、あきれほど忙しいころなので、幾日もお見舞い申し上げなかつた氣がかりさよ」

と言つて、以前の部屋にお入りになる。御枕もと近くでお話し申し上げるが、お声もないようで、お返事できない。

「こんなに重くおなりになるまで、誰も誰もお知らせくださらなかつたのが、つらいよ。心配しても効ないことだ」

と恨んで、いつもの阿闍梨、世間一般に効驗があると言われてゐる人をすべて、大勢お召しになる。御修法や、読経を翌日から始めさせようとなさつて、殿邸の人が大勢参集して、上下の人たちが騒いでゐるので、心細さがすっかりなくなつて頼もしさである。

「第六段 薫、大君を看護する」

暮れたので、いつもの、あちらの部屋に」と申し上げて、御湯漬などを差し上げようとすが、せめて近くで看病をしよう」と言つて、南の廂間は僧の座席なので、東面のもう少し近い所に、屏風などを立てさせて入つてお座りになる。

中の宮は、困つたこととお思ひになつたが、お一人の仲を、やはり、何でもなくはないのだ」と皆が思つて、よそよそしくは隔てたりはしない。初夜から始めて、法華経を不断に読ませなさる。声の尊い僧すべて十二人で、実に尊い。

灯火はこちらの南の間に燈して、内側は暗いので、几帳を引き上げて、少し入つて拝見なさると、老女連中が二、三人伺候している。中の宮は、さつとお隠れになつたので、たいそう人少なで、心細く臥せつていらつしやるのを、

「どうして、お声だけでも聞かせてくださらないのか」

と言つて、お手を取つてお声をかけて差し上げると、

「気持ちはそのつもりでいても、物を言うのがとても苦しくて。幾日も訪れてくださいなかつたので、お目にかかれないうままにこと切れてしまつたのではないかと、残念に思つておりました」

と、やつとの声でおしやる。

「こんなにお待ちくださるまで参らなかつたことよ」

と言つて、しゃくりあげてお泣きになる。お額など、少し熱がおありであつた。

「何の罪による」病気が。人を嘆かせると、こつなるのですよ」

と、お耳に口を当てて、いろいろ多く申し上げなさるので、うるさくも恥ずかしくも思われて、顔を被いなさつてゐるのを、死なせてしまつたらどんな気がするだろう、と胸も張り裂ける思いでいられる。

「何日もし看病なさつてお疲れも、大変なことでしょう。せめて今夜だけでも、安心してお休みなさい。宿直人が伺候しましょう」

と申し上げなされると、気がかりであるが、何かわけがあるのだろう」ととお思ひになつて、少し退きなされた。

面と向かつてといつたのではないが、這い寄りながら拝見なさると、とても

苦しく恥ずかしいが、「このような宿縁であつたのだらう」とお思ひになつて、この上なく穏やかで安心なお心を、あのもうお一方にお比へ申し上げなされると、しみじみとありがたく思ひ知られなされた。

「亡くなつた後の思ひ出にも、強情な、思ひやりのない女だと思われまい」とお憤みなさつて、そつけなくおあしらいになつたりなさらない。一晚中、女房に指図して、お薬湯などを差し上げなさるが、少しもお飲みになる様子もない。大変なことだ。どのようにして、お命を取り止めることができるか」と、何とも言いようがなく沈みこんでいらつしやつた。

#### 「第七段 阿闍梨、八の宮の夢を語る」

不断の読経の、明け方に交替する声がたいそう尊いので、阿闍梨も徹夜で勤めていて居眠りをしてたのが、ふと目を覚まして陀羅尼を読む。老いしわがれた声だが、実にありがたそうで頼もしく聞こえる。

「どのようにつ今夜はおいででしたか」

などとお尋ね申し上げる機会に、故宮のお事などを申し上げて、鼻をしばばかんで、

「どのような世界にいらつしやるのでしょうか。そうはいつても、涼しい極楽に、と想像いたしておりましたが、先頃の夢にお見えになりました。

俗人のお姿で、世の中を深く厭い離れていたのが、執着するところはなかつたが、わずかに思つていたことに乱れが生じて、今しばらく願つていた極楽浄土から離れているのを思つと、とても悔しい。追善供養をせよ」とまことにはつきりと仰せになつたが、すぐにご供養申し上げる方法が思ひ浮かびませんので、できる範囲内で、修業している法師たち五、六人で、何々の称名念仏を称えさせております。

その他は、考えるところがございまして、常不軽を行わせております。などと申すので、君もひどくお泣きになる。あの世までお邪魔申した罪障を、苦しい気持ちに、ますます息も絶えそつに思われなさる。

「何とか、あのまだ行く所がお定まりにならない前に参つて、同じ所にも」と、聞きながら臥せつていらつしやつた。

阿闍梨は言葉少なに立つた。この常不軽は、その近辺の里々、京まで歩

き回つたが、明け方の嵐に難渋して、阿闍梨のお勤めしている所を尋ねて、中門のもとに座つて、たいそう尊く拝する。回向の偈の終わりのほうの文句が実にありがたい。客人もこの方面に関心のあるお方で、しみじみと感動に堪えられない。

中の宮が、まことに気がかりで、奥のほうにある几帳の背後にお寄りになつて、さうと居すまいを正しなさつて、

「不軽の声はどのようにお聞きあそばしましたでしょうか。重々しい祈祷としては行わないのですが、尊くございました」と言つて、

「霜が冷たく凍る汀の千鳥が堪えかねて、寂しく鳴く声が悲しい、明け方ですぬ」

話すように申し上げなさる。冷淡な方のご様子にも似ていて、思い比べられるが、返事しにくくて、弁を介して申し上げなさる。

「明け方の霜を払つて鳴く千鳥も、悲しんでいる人の心が分かるのでしょうか」

不似合いな代役だが、氣品を失わず申し上げる。このようになちよつとしたことも、遠慮されるものの、やさしく上手におとりなしなさるものを、今を最後と別れてしまつたら、どんなに悲しい気がするだろう」と、目の前がまっくらにおなりになる。

「第八段 豊明の夜、薫と大君、京を思う」

宮が夢に現れなかつた様子をお考えになると、このようにおいたわしいお二方のご境遇を、宙空をさ迷いながらどのように御覧になつていられるだろう」と推察されて、お籠もりになつたお寺にも、御誦經をおさせになる。所々にご祈祷の使者をお出しになつて、朝廷にも私邸のほうにも、お休暇の旨を申されて、祀りや被い、いろいろと思ひ至らないことのないほどなさるが、何かの罪によるお病氣でもなかつたので、何の効目も見えない。

「自身でも、治りたいと思つて、仏をお祈りなさればだが、はやり、このような機会に何とかして死にたい。この君がこうして付き添つて、余命残りなくなつたが、今はもう他人で過すすべもない。そうかといつて、このように並々ならず見える愛情だが、思つたほどでない、自分も

相手もそう思われるのは、つらく情けないことである。もし寿命が無理に延びたら、病氣にかこつて、姿を変えてしまおう。そうしてだけ、未長い心を互いに見届けることができるのだ」

と思ひ決めなつて、

「生きるにせよ、死ぬにせよ、何とかこの出家を遂げたい」とお思ひになるのを、そこまで賢ぶつたことはおつしやらずに、中の宮に、

「氣分がますます頼りなく思われるので、戒を受けると、とても効目があつて寿命が延びることだと聞いていたが、そのように阿闍梨におつしやつて

ください」

と申し上げなさると、みな泣き騒いで、

「とんでもない御ことです。こんなにまでお心を痛めていらつしやるような中納言殿も、どんなにがっかり申されることでしょう」

と、ふさわしくないことと思つて、頼りにしている方にも申し上げないので、残念にお思ひになる。

このように籠もつていらつしやつたので、次々と聞き伝えて、お見舞いにわざわざやつて来る人もいる。いい加減にはお思ひでない方だ、と拝見するので、殿上人や、親しい家司などは、それぞれいろいろなご祈祷をさせ、ご心配申し上げます。

豊明の節会は今日であると、京をお思ひやりになる。風がひどく吹いて、雪が降る様子があわただしく荒れ狂う。「都ではとてもこうではあるまい」と、自ら招いてのこととはいえ心細くて、他人関係のまま終わつてしまふのだろうかと、思つて宿縁はつらいけれど、恨むこともできない。やさしくかわいらしいおもてなしを、ただ少しの間でも元どおりにして、思つていたことを話したい」と、思ひ続けながら眺めていらつしやる。光もささず暮れてしまつた。

「かき曇つて日の光も見えない奥山で、心を暗くする今日このごろだ」

「第九段 薫、大君に寄り添う」

ただ、こうしておいでになるのを頼みに、皆がお思ひ申し上げていた。いつもの、近いお側に座つていらつしやるが、御几帳などを、風が烈しく吹

くので、中の宮、奥のほうにお入りになる。見苦しそうな人びとも、恥ずかしがって隠れているところで、たいそう近くに寄って、

「どのようなお具合ですか。心のありたけを尽くして、ご祈祷申し上げる効もなく、お声をさえ聞かなくなってしまうので、まことに情けない。後に遺して逝かれなされたら、ひどくつらいことでしょう」

と、泣く泣く申し上げなさる。意識もはつきりしなくなつた様子だが、顔はまことによく隠していらつしやうた。

「自分の良い時があつたら、申し上げたいこともございますが、ただもう息も絶えそうにばかりなつてゆくのは、心残りなことです」

と、本当に悲しいと思つていらつしやる様子なので、ますます感情を抑えがたくなつて、不吉に、このように心細そうに思つて見られるとは見られまいと、お隠しになるが、泣き声まで上げられてしまふ。

「どのような宿縁で、この上なくお慕い申し上げながら、つらいことが多くてお別れ申すのだからか。少し嫌な様子でもお見せになったら、思いを冷ますきつかけにしよう」

と見守つているが、ますますいとしく惜しく、美しいご様子ばかりが見える。

腕などもたいそう細くなつて、影のように弱々しいが、肌の色艶も変わらず、白く美しそふになよよとして、白い御衣類の柔らかなうえに、衾を押しやつて、中に身のない雛人形を臥せたよふな気がして、お髪はたいして多くもなくうちやられてゐる、それが、枕からこぼれてゐる側が、つやつやと素晴らしく美しいのも、どのようにおなりになつてゐるのか」と、生きていかれそふにもなく見えるのが、惜しいことは類がない。

幾月も長く思つて、身づくろいもしてない様子が、気を許そふともせず恥ずかしそふで、この上なく飾りたてる人よりも多くまさつて、こまかに見ていると、魂も抜け出してしまふそふである。

## 第七章 大君の物語 大君の死と薫の悲嘆

「第一段 大君、もの隠れゆくように死す」

「とうとう捨てて逝つておしまひになつたら、この世に少しも生きてゐる気がしない。寿命がもし決まつていて生き永らえたとしても、深い山に分け入るつもりです。ただ、とてもお氣の毒に、お残りになる方の御事を心配いたします」

と、答えさせていただこふと思つて、あの方の御事におふれになると、顔を隠していらつしやうたお袖を少し離して、

「このよふに、はかなかつたものを、思いやりがないよふにお思ひなさつたのも効がないので、このお残りになる人を、同じよふにお思ひ申し上げてくださいと、それとなく申し上げましたが、その通りになってくださつたら、どんなに安心して死ねたろうかと、この点だけが恨めしいことで、執着が残りそふに思われます」

とおつしやるので、

「このよふにひどく、物思ひをする身の上なのでしようか。何としても、かんとしても、他の人には執着することがございませんでしたので、ご意向にお従ひ申し上げずになつてしまいました。今になつて、悔しくいたわしく思われます。けれども、ご心配申し上げなさいませぬ」

などと慰めて、たいそう苦しそふでいらつしやるので、修法の阿闍梨たちを召し入れさせて、いろいろな効験のある僧全員して、加持して差し上げさせなさる。ご自分でも仏にお祈りあそばすこと、この上ない。

「世の中を特に厭い離れなさい、とお勧めになる仏などが、とてもこのよふにひどい目にお遭わせになるのだからか。見てゐる前で物が隠れてゆくよふにして、お亡くなりになつたのは、何と悲しいことであるか」

引き止める方法もなく、足摺りもしそふに、人が馬鹿だと見ることも気にしない。ご臨終と拝しなつて、中の宮が、後れまいと嘆き悲しみなさる様子ももつともなことである。正氣を失つたよふにお見えになるのを、いつもの、利口ぶつた女房連中が、「今は、まことに不吉なこと」と、お引き離し申し上げる。

「第二段 大君の火葬と薫の忌籠もり」

中納言の君は、そうはいっても、まさかこんなことにはなるまい、夢か、とお思いになって、大殿油を近くに芯をかき立てて拝見なさると、お隠しになっている顔も、まるで寝ていらつしやるように、変わっておいでになるところもなく、かわいらしげに臥せっていらつしやるのを、「このままで、虫の脱殻のようにずつと見続けることができるものならば」と、悲しみにくれる。

「ご臨終の作法をする時に、お髪をかきやると、さつと匂うのが、まるで生きていた時の匂いそのまま、懐かしく香ばしいのも、

「世に比類なく、どうしてこの人を、少しでも普通の女性であつたと思ひ諦められようか。ほんとうに世の中を思い捨て去る道しるべならば、恐ろしそうな醜いことで、悲しさも冷めてしまひそうなどころだけでも見つけさせてください」

と仏にお祈りになるが、ますます悲しみを慰めようもなくなるばかりなので、どうしようもなくて、「ひと思いにせめて火葬にしまおう」とお思いになって、あれこれ例の葬式をするのが、何ともいいようのないことであつた。

宙を歩くようにふらふらとして、最後に空に上る様子さえ頼りなさそうでも、煙も多くはお立ちにならなかつたのもあつたことと、茫然としてお帰りになつた。

御忌中に籠もっている人の数が多くて、心細さは少し紛れそうだが、中の宮は、人の目や思惑も恥ずかしい身の情けなさを悲観なさつて、同じく死んだ人のようにお見えになる。

宮からもご申問をたいそう頻繁に差し上げなさる。意外でつくづくとお思い申し上げていらつしやつたお気持ちも、お直りにならずに亡くなつてしまつたことをお思いになると、まことにつらいご縁の方である。

中納言は、このようにこの世がまことにつらく思われる機会に、出家の本願を遂げようとお思いになるが、三条宮がお悲しみになることに気がねし、この姫君の御事のおいたわしさに思い乱れて、

「あの方がおつしやつたようにして、形見としてでも結婚すべきであつたよ。心の底では、身を分けた姉妹でいらしても、気を移せるようには思えなかつたが、このようにお悲しみ申し上げさせるよりは、いつそ深い仲になつて、

尽きない慰めとしてずつとお世話申し上げてゆくべきであつたのに」

などとお思いになる。

ちよつとも京にお出にならず、ぶつりと、慰めようもなく籠もつておいでになるのを、世の人も、並々ならず悲しんでいらつしやる、と見聞きして、帝をはじめ申して、「ご申問が多かつた。」

### 「第三段 七日常の法事と薫の悲嘆」

とりとめもなく幾日も過ぎてゆく。七日常の法事も、たいそう尊くおさせになつては、心をこめて供養なさるが、規則があるので、お召し物の色の変わらないのを、あの御方を特に慕つていた女房たちが、たいそう黒く着替えているのを、ちらつと御覧になるにつけても、

「紅色に落ちる涙が何にもならないのは、形見の喪服の色を染めないことだ」  
許し色の氷が解けないかと思えるのを、ますます濡らし加えながら物思いに沈んでいらつしやるお姿は、たいそう艶っぽく美しい。女房たちが覗きながら拝見して、

「亡くなつてしまつたお方のことはしかたないとして、この殿がこのようにお親しみ申されて、これからは他人とお思い申し上げるのは、惜しく残念なことだわ」

「意外なご運勢でいらつしやつたわ。こんなに深いお志を、どちらもお添いになれなかつたとは」

と言つて、泣きあつている。

この御方には、

「亡くなつた方のお形見として、今は何でも申し上げ、承りたいと存じております。よそよそしくお思いなさいませんに」

と申し上げなさるが、「万事が嫌な身の上だ」と、何もかも氣後れして、まだお会いしてお話など申し上げなさらない。

「この姫君は、はきはきとした方で、もう少し子供っぽく、気高きいらつしやる一方で、親しみがあつるおいのある人柄という点では劣つていらつしやる」

と、何かにつけて思われる。

雪が烈しく降る日、一日中物思いに沈んで、世間の人が殺風景な物といふ十二月の月夜の、曇りなく照りだしているのを、簾を巻き上げて御覧になると、向かい側の寺の鐘の音を、枕をそばだてて、今日も暮れたと、かすかな音を聞いて、

「後れまいと空を行く月が慕われる。いつまでも住んでいられないこの世なので、」

風がたいそう烈しいので、部を下ろさせなされると、四方の山の鏡に見える汀の氷が、月の光に実に美しい。京の邸をこの上なく磨いても、こんなにはまだできまい」と思われる。かろうじて少しでも生き返りなさうたら、一緒に語りあえたものを」と思い続けると、胸がいつぱいになる。

「恋いわびて死ぬ薬が欲しいゆえに、雪の山に分け入って跡を晦ましてしまいたい」

「半偈を教えたという鬼でもいてくれたら、かこつけて身を投げたい」とお考えになるのは、未練がましい道心であるよ。

女房たちを近くに呼び出しなさうと、話などをおさせになる様子などが、まことに理想的でゆつたりとして情愛深いのを、拜する女房たち、若い者は、心にしみて立派だと思ひ申し上げる。年とつた者は、ただ口惜しく残念なことを、ますます思う。

「ご病気が重態におなりあそばしたことも、ただあの宮の御事を思ひもかけずお迎えなさうと、物笑いで辛いとお思ひのようであつたが、何といつてもあの御方には、こう心配していると知られ申すまいと、ただお胸の内二人の仲を嘆いていらつしやるうちに、ちよつとした果物もお口におふれにならず、すっかりお弱りあそばしたようでした。

表面では何ほど大げさに心配しているようにはお振る舞いあそばさず、お心の底ではこの上なく、何事もご心配のようであつて、故宮のご遺戒にまで背いてしまったことと、ひとことながら妹君のお身の上をお悩み続けたのでした」

と申し上げて、時々あつしやうしたことなどを話し出しては、誰も彼もいつまでも泣きくれている。

「自分のせいで、つまらない心配をおかけ申したこと」と元に戻したく、すべての世の中がつかいので、念誦をますますしみじみとなさうと、うとうととする間もなく夜を明かしなされると、まだ夜明け前の雪の様子が、たいそう寒そうなかを、人びとの声がたくさんして、馬の声が聞こえる。

「誰がいつたいこのような夜中に雪の中を來きたのだらうか」

と、大徳たちも目を覚まして思つていると、宮が、狩のお召物でひどく身をやつして、濡れながらお入りなうと來るのであつた。戸を叩きなされる様子が、そうである、とお聞きになうと、中納言は、奥のほうにお入りになうと、隠れていらつしやる。御忌中の日数は残つていたが、ご心配でたまらなくなうと、一晚中雪に難儀されながらおいでになうたのであつた。

今までのつらさも紛れてしまひそんなことだけれど、お会いなさる気もせず、お嘆きになうていた様子が恥ずかしかつたが、そのまま見直していただけなかつたことを、今から以後にお心が改まつたところで、何の効もないようにすつかり思ひ込んでいらつしやるので、誰も彼もが、強く道理を説いて申し上げ申し上げしては、物越しに、これまでのご無沙汰の詫びを言葉を尽くしておつしやるのを、つくづくと聞いていらつしやうた。

この君もまことに生きていくのかいのかの様子で、後をお追いなさるのではないかと感じられるご様子のおいたわしさを、心配でたまらなう」と、宮もお思ひになうていた。

今日は、わが身がどうなるうともと、お泊まりになうた。物を隔ててでなく、としきりにおせがみになるが、

「もつ少し気持ちがすつきりしましてから」

とばかり申し上げなうと、冷たいのを、中納言もその様子をお聞きになうと、しかるべき女房を召し出して、

「お気持ちに反して、薄情なようなお振る舞いで、以前も今も情けなかつた一月余りのご無沙汰の罪は、きつとそうもお思ひ申し上げなさるのも当然なことですが、憎らしくない程度に、お懲らしめ申し上げなさいませ。このようなことは、まだご経験のないことなので、困つておいででしょう」

などと、こつそりとおせつかいなさるので、ますますこの君のお気持ち  
が恥ずかしくて、お答え申し上げることがおできになれない。

「あきれらくらい情けなくいらっしやるよ。お約束申し上げたことを、すつ  
かりお忘れになつたようだ」

と、並々ならず嘆いて日をお送りになつた。

「第六段 勾宮と中の君、和歌を詠み交す」

夜の様子は、ますます烈しい風の音に、自分のせいで嘆き臥していらつ  
しやるのも、さすがに気の毒で、例によつて、物を隔てて申し上げなさる。  
数々の神の名をあげて、将来長くお約束申し上げなさるのも、どうしてこ  
んなに口馴れていらっしやるのだらう」と、嫌な気がするが、離れていて  
薄情な時のつらさよりは胸にしみて、女君の気持ちも柔らかくなつてしま  
いそつなご様子を、一方的にも嫌つてばかりいられない。ただ、じつと耳  
を傾けていて、

「過ぎ去つたことを思い出しても頼りないのに、将来までどうして当てにな  
りましょう」

と、かすかにおつしやる。かえつて気がふさぎ、気が気でない。

「将来が短いものと思つたら、せめてわたしの前だけでも背かないでほしい  
何事もまことにこのように瞬く間に変わる世の中を、罪深くお思いなさ  
るな」

と、いろいろと宥めなさるが、

「気分が悪くて」

と言つてお入りになつてしまつた。女房が見ているのもとても体裁が悪  
くて、嘆きながら夜を明かしなさる。恨むのも無理もない際であるが、あ  
まりにも無愛想なのではと、つらい涙が落ちるので、まして私以上にどん  
なにおつらいであるう」と、いろいろとお気の毒に思わずにはいらつしや  
れない。

中納言が、主人方に住みついて、人びとをやすやすすと召し使い、人も大  
勢して食事を差し上げなどさせたりなさるのを、感慨深くもおもしろくも  
御覧になる。たいそつひびく瘦せ青ざめて、茫然と物思ひしているので、気

の毒にと御覧になつて、心をこめてお見舞い申し上げなさる。

「生前のことなど、言つても始まらないことだが、この宮だけには申し上げ  
よう」と思うが、口に出すにつけても、まことに意気地がなく、愚かしく  
見られ申すのに気が引けて、言葉少なである。声を上げて泣きながら、日  
数が過ぎたので、顔が変わつたのも、見苦しくはなく、ますます美しく艶  
やかなのを、女であつたら、きつと心移りがしよう」と、自分の良くない  
性癖をお思いつきになると、何となく不安になつたので、何とか世間の非  
難や恨みを取り除いて、京に引越させよう」とお考えになる。

このように打ち解けないけれども、帝にもお耳にあそばして、まことに  
具合の悪いことになるにちがいないとお困りになつて、今日はお帰りあそ  
ばした。並々ならずお言葉を尽くしなさるが、相手にされないとはいつらいも  
のだと、それだけを知つていただきたくて、ついに気をお許しにらなかつた。

「第七段 歳暮に薫、宇治から帰京」

年の暮方では、こんな山里でなくても、空の模様がいつもとちがうのに、  
荒れない日はなく降り積む雪に、物思ひに沈みながら日をお送りになる気  
持ちは、尽きせず夢のようである。

宮からも、御誦経などをうるさいまでにお見舞い申し上げなさる。こう  
してばかりいては、新年まで嘆き過すことになるう。あちらこちらと、音  
沙汰なく籠もつていらっしやることを申し上げられるので、今はもうお帰  
りになる気持ちも、何にもたとえようがない。

このようにお住みつきなさつて、人が多かつたのがすっかりいなくなる  
のを、悲しむ女房たちは、大変であつた時の当面の悲しかった騒ぎよりも、  
ひつそりとしてひどく悲しく思われる。

時々、折節に、風流な感じにお話し交わしなかつた年月よりも、こうして  
のんびりと過ごしていらした今までの、ご様子がやさしく情け深くて、風  
流事にも実際面にも、よく行き届いたお人柄を、今を限りに拝見できなく  
なつたこと

と、一同涙に暮れていた。

あの宮からは、

「やはり、このように参ることがとても難しいのに困って、近くにお引越し申し上げるときを、考え出した」

と申し上げなされた。後の宮がお耳にあそばして、

「中納言もこのように並々ならず悲しみに茫然としていたのは、なるほど、普通の扱いはできない方と、どなたもお思いなのではあるう」と、お気の毒になつて、「二条院の西の対に迎えなされて、時々お通いになるよう、内々に申し上げなされたのは、女一の宮の御方の女房にとお考えになつてゐるのではないか」

とお疑いになりながらも、会えないことがないのは嬉しくて、おっしゃつて来られたのであつた。

「そういうことになつたらしい」と、中納言もお聞きになつて、

「二条宮邸も完成して、お迎え申し上げることを考えていたが。あのお方の代わりとしてお世話すべきであつた」

などと、昔のことを思つて心細い。宮がお疑いになつていたらしい方面は、まことに似つかわしくないことと思ひ離れていて、一般的なご後見は、自分以外に、誰ができようか」と、お思いになつていたとか。